

洪水概略

今も自然をそのままに残しているといわれ、幡多のシンボルと賞讃される渡川は、数千年間交通運輸や産業等の上で幾多の恩恵を幡多にもたらしてはきたが、反面幡多の災害は大なり小なりこの川と大きなかわりをもつて来たことも否めない。

渡川の源流仁井田川が高岡郡大野見・仁井田郷に発し、幡多郡大正町田野々で高岡郡津野山郷に発する梶原川を合わせ、更に愛媛県北宇和郡に発した吉野川を西土佐村川崎で合わせて次第に水勢、水量をまして西土佐村を南下し、目黒川・奥屋内川等をあわせ、更に中村市内に入ると中筋川・後川をいれて下田港で海にそそいでいる。全長約百七十七キロ(市史上巻)、舟楫里程田野々より下流七十五キロ(四十年史)。その間数多くの支流をいれている。

しかもこの川の特徴は、上流高岡郡窪川町に於て十キロ足らずと海岸に近づき、それより西に一転して内陸県境に蛇行あるいは突進して西土佐村川崎に至り、そこで大転換をして南下して当市に進み、N字形に流れるという全国的にも珍しい流型を示した川で上中流で三大流を合わせて流域広大、何分にも当地方が北に四国山地を負い、南は太平洋に面し、ために洋上の颱風は屢々この地を襲い、こうして年々歳々洪水禍を招来し、時には目もあてられぬ大惨禍となることも古来幾度か。しかも気象状況によっては必ずしも幡多の降雨でなく高岡郡や愛媛県の豪雨がこの地に大洪水をもたらすことも考慮しなければならない。

中村市は全域渡川・中筋川・後川の流域に入っており、しかも現在は旧富山地区と旧中村町内の不破地区をのぞいては殆んど集落が大なり小なり堤防によって守られているが、中心地中村ですら昭和の初期までは後川には一かけらの堤防もなく、洪水の都度水の猛威に翻弄されたわけである。

しかも上町(現本町五丁目)紺屋町(現京町五丁目)ランカ(現一条通四丁目)などはそれぞれ今よりも二米以上も低く(堤防等構築によつてかさ上げを余儀なくされたせいもある)殆んど毎年のように洪水、年によっては一年に数回の出水も屢々である。私が生れ、今に住む京町一丁目は、旧岩崎堤防にのぼる坂となっている旧西下町(現大橋通一、二丁目)をのぞいて町内で一番高い町であるが、それでも三、四年に一回くらいは浸水さわぎ、そんな時は東隣りの新町は床上数尺であり、京町で床上浸水の時新町では殆んど二階へ浸水である。小姓町でも新町と同様といえよう。何分にも「ヒキンションベンヒテモミズンデル。」(蛙が小便しても水が出る。)といわれる中村であり、文字通り毎年水の洗礼である。従つて町の端々の商家では、当時つし二階建が多かったが、二階の屋根裏へ滑車とりつけその真下の二階敷板三尺四方を切り抜いてふだんはふたをしておき、そりゃ「荷揚げぞ」という時はその板をとりのぞいて一階の商品を二階へ運ぶしくみの店もあった。中には次の洪水を恐れて秋口迄商品を二階へそのままにおいて店はガランどうに近い家もあった。

また敷地の竹田功氏の家は谷間の一番奥の方にあり、かなりの上り坂となっている……がその家ですら、居家ガリヤの裏側に幅約一・五〇呎、高さ約五〇寸の小窓を設けて、増水の時避難用の船の乗り場としている。こんな窓を今も残している家が近所にはかにもある。

また若い頃旅行して汽車の窓外の風景で、広い田園の中に田圃や畑にとりかこまれた農家が平穏そうに散在する風景を多く見うけてわが郷土と思いくらべ怪訝(げげん)な思いをした。中村近郷の農村では決して見うけられない風景である。こちらの農家は多くは山麓のやや小高い所にあり道路からは小さな坂や石段で上りおりをしなければならなかった。

しかし近頃では例えば古津賀・具同等の如く一般の田圃と余り高さの違わない道路わきに次々に建築が進められているが、これは一に堤防を信頼しているからであろう。殆んど毎年のように洪水に見舞われた小生らには

災害編

次の懸念がある。

幡多の考古遺跡は渡川・中筋川・後川などの沿線に多く、それらはすべて現地表から二層乃至六層位の深さに出ている。これは二千年三千年の昔からそれだけ沖積されたことを物語るものであるが、これを年平均でみつると年間一ミ〜三ミくらいと僅かづつ土地が上っていることを示す。しかしそこに堤防がありとしても補強、かさ上げをしない限り堤防は一ミもあがらないことを素人考えに思う。しかも基準にしている昭和十年大洪水以上の突発的大洪水もありうることであり、堤防を信頼しきることは危険であると思われる。以下藩政期以降の洪水禍を諸家文書その他の資料により時代順に左記したい。

明治十八年迄の風水害年表

上岡正五郎調査記録 資料は御家年代略記(略記) 渡川改修四十年史(又は治水)(四十年史) 中村町風水害史(水害史) 中村町史(町史) その他小野家・宮崎家・その他の資料による。カッパ書で資料を記載する。西暦は千・百代を省略することあり。

年号	西暦	記	年号	西暦	記
元和八	1622	稀なる洪水(小野)	寛文元	61	となり、天神宮にも池を生ず。中村町は流失し、安並、石見寺下に家財道具類流れたり。(水害史)
万治元	58	8・19・大雨洪水・幡多郡九千石余損田(小野) 8・20・大洪水。山路・坂本・不破村家半分流失のこと(小野)死亡男女合せて十二人・流家三四七・潰家六八四(略記)	寛文二	62	7・5〜6 洪水、田畑一万石余損耗。(水害史) 6・29・7・2 風雨・洪水。田畑(土佐)四万石余損耗。(宮崎)
万治二	59	9・20・大風雨。岩崎堤防決潰。八面宮池			

洪水

年号	西暦	記	年号	西暦	記
寛文三	63	幡多郡内、川筋大洪水。上山之中、山中十ヶ村并大通村(大用村か)洪水ニ痛ニ付百姓共草臥申す。(野中兼山関係文書)	延宝六	78	難斗、早く御立のき被遊候と申上。乗物に被召、寺の門迄御出被成と其跡へぬけ、どうと落申由。今少之事にて御命の大事故難を遁させ給。久右衛門へ御褒詞を被仰付、御差替の御腰物河内守国助御縫御拝領仕候。云々(大海集)
寛文五	65	9・大洪水、田畑被損(水害史)	天和元	81	7・4 大洪水。山路村本村之家数九軒残り其外ハ流失(中略)右万治元并寛文六丙年之洪水ニ山路村嶋島四百四十石不残損田荒ニ成(小野)渡川々筋洪水也。此時当川筋種物を失う(広恵簿)
寛文六	66	7・6・大洪水、御国中大損耗、男女百五十一人死、八万千石余損耗(水害史) 土佐中村の地七月四日、十一日、十五日洪水。田畑三万石水害被り、男十人女二十七人、牛馬五七九匹溺死し、民家二〇三七軒・船十七流失(県災害史)	貞享四	87	7・18 土佐高知大風雨にて、支封山内大膳亮豊明が所領(中村)をかけて民屋三千九十五顆壊し、堤防八百間、船二十艘損ズ(県災害史)
		寛文六丙年七月七・八日両日大風水、大川筋・小谷つへぬけ(山崩)埋り、大川筋皆々流失、人馬流死致す。中村下モ町大堤(岩崎)切れ、家一軒も不残、町は川原に成。死人 夥敷 事也。云々。匠作様(幡多山内藩主忠直公) 戸内通御下向被遊。遊ばざる	元禄一四	1701	洪水故飢饉にて暮・明る春餓死人多き事(小野)
		寛文六丙年七月の洪水の日御着被遊。御屋敷へ水入(土居屋敷) 妙因寺(現天理) 鐘樓(御座所) 堂え当分被成御座候。前桜木久右衛門申上は、此所は上えたち候。つえぬけ候も			9・9 大風雨、国中大損害(水害史) 四月より六月迄旱魃、八月十六、七日洪水(水害史) 大日照、近郷天水之村々ハ無立

年号	西暦	記	年号	西暦	記
元禄一五	02	毛(稲が枯れて)御買物不立候事(小野) 七月廿八日、八月卅日、大風雨、高潮・両度の風雨にて損耗十六万石余、永荒地一千石余(水害)大水兩度。廿八日の水、庄屋(山路)内庭迄入。閏廿九日昼庄屋外庭迄入。此水ニ木戸ノ瀬埋り、入田、津蔵湖、古津賀、鍋島より農夫来り堀申事(小野)	享保七	22	6・23 洪水、大損耗、前年に倍する大洪水なり。世に所謂「丑寅の洪水」と称するは享保六・七年の洪水のことなり。俗諺に「丑寅の洪水もさだちより起り、源平の戦も狂ひより起る。」と(町史)
宝永元	04	七月一日、四月十七日、度々洪水、損耗八万石余(水害)	元文四	32	8月 国中大損毛
〃三	06	6・25 風雨 損耗八万余石(水害)	寛保元	41	6・8 大水。在所中(山路)へ上ル。幡多郡御買物難洪(小野)
〃四	07	8・19 大風雨(水害) 8・20 大洪水、庄屋々舗(山路) 門迄来候(水害)	寛保三	43	6・7 洪水。(町史) 7・22 洪水大風。在所(山路)中、家十三軒潰家ト成ル。(小野)
〃五	08	五月六月 度々風雨出水(水害)	延享元	44	7・8 大風雨(中略)立毛共風ニやられ痛む唐黍類スベテ実不レ入(小野)
〃六	09	4・17 大雨洪水、八月 風雨洪水(水害)	延享二	45	8・10 大風雨。九日より十日昼八ツ(午後)迄風増風ニテ諸作物竹木迄南風当ル。枯る。幡多郡大傷(小野)
正徳二	12	七月五日より十五日迄度々大洪水あり。作物大傷 幡多郡中村、町中水の高さ地より六尺(約二) 人々山へ登り、中二日山ニ在リ。(水害) 丑ノ閏七月六日洪水、同五日渡り川筋五十年來之洪水也(広恵簿)	延享三	46	八幡御神事、洪水ニ付相延。廿日ニ極候へ共、雨天・雨ニテ廿三日ニ相極。(小野)
享保六	21		寛延二	49	8・23 大風雨(市史)
					5・21 洪水飢饉(太平寺)

年号	西暦	記	年号	西暦	記
宝曆二	52	2・25 雨天大雷、御城下幡多共(小野)	天明元	81	8・23 山潮・大洪水、専ら谷々の水強く当辺は森沢村就中大破損。堤大切れ、人家不残押つぶす。二番に深木。三番山路。その他間崎津蔵湖など破損、損田ニ相成。破損所御普請御割付、村々へ夥敷掛り(出役の)山路村へも千六百人余かかる。尤新田へもかかる也(小野)
宝曆七	57	7・26 大風雨・潮入(水害) 大風大雨洪水国中家傷、諸木根こげ相傷(御城下猶又大風。御城御屋敷諸方御会所、并神社寺々不レ残傷(小野))	天明二	82	洪水度々7・8大。七月大雨洪水?、立毛大傷(中略)百姓不レ残未進(買物)ニ相成、及レ飢者数々(下略)(小野)
宝曆十二	62	6・26 大風雨・山潮 本郡死者八人、享保丑寅以來之洪水なり。(町史)六月十五日大雷朝六ツ(午前)より八ツ時(午後)迄大鳴り。政平役下共へ式つ落る。同月廿六日山中(富山)之中古尾・竹屋敷本田悉く崩れ、本川筋は下山郷之内、岩間村、奥屋内村山々つえぬけ、奥屋内御番所もついに埋れ番人即死。本川筋、後川筋三尺四尺ゴミを置、粗悉くゴミかづきニ相成る。(小野)	天明三	83	6 洪水二度致。山路外輪往還へ水上り申候(小野)(この頃い、わゆる天明の大飢饉)
明和二	65	下山・橋上八人死失、七月十三、十四日又大風、八月三日夜大雷(宮崎)	天明四	84	6・11 大雨大洪水。田畑損毛(小野)
安永元	72	6・16 大風大水、7・17 洪水、往還堤をば限、7・27 大風雨、8・2 堤より上二尺程越え夜に入り居宅に入る(下略)(宮崎)	天明五	85	7・12 より18迄大雨(水害)
		8・22 大風雨損耗(水害史)	天明六	86	7・27 より大雨。8・29 大雨風強ク三十ヶ年已來之大時化と申事(小野)
			天明八	88	7・22 迄大雨洪水。此年兩年にて五月より能く降り又土用も降り続き、夫より七月八月九月月々二十日の雨にて立毛も六歩通りの所務(収穫)にて一統不景氣、困窮止

年号	西暦	記	事	年号	西暦	記	事
寛政三	91	8・大風(水害)	り不申候(小野)	文化元	1804	銀四分之御定ニ御座候(小野)(出夫についで貴重資料である)	
寛政四	92	7・26大風雨。家屋破損六千二百余軒。死者十一人(水害)	7・26大風雨。家屋破損六千二百余軒。死者十一人(水害)			7・25より風雨ニ相成(り)26日朝卯刻(前)頃より大風大雨終日にして酉ノ刻(後)頃より成の刻(後)頃迄大洪水。人家へ水上り庄屋宅へも水上り、敷板より水境五寸にして留り申候。山分筋より材木・保佐夥數流失。下川筋田畑共大いたみ。又八月中雨天。八月廿九日又々風雨、洪水。御郡中人家・御普請所破損。井沢ノ向イ御普請所大破ニテ、内川へ石砂盛込(小野)	
寛政七	95	8 洪水。幡多郡にて死人一人、損田二千九百三十四石余。堤切崩二万二千五十間余、流家十二軒(略記)	8 洪水。幡多郡にて死人一人、損田二千九百三十四石余。堤切崩二万二千五十間余、流家十二軒(略記)			秋八月末、九月最初兩度風雨(小野)(註小野家記録は以下なし)	
寛政八	96	8・10~11大風雨いたし大洪水ニ相成。実崎村人家不レ残水上り、自宅(山路)庄屋家も床下迄水付き申候(小野)	8・10~11大風雨いたし大洪水ニ相成。実崎村人家不レ残水上り、自宅(山路)庄屋家も床下迄水付き申候(小野)	文化四	07	7・11(太平)寺) 8・9洪水16~19大風雨洪水(太平)寺)	七月より八月迄風雨洪水。(県内損害有)幡多郡ニテ死人一人損田二千九百三十四石余、堤切崩二万二千五十間余、流家十二軒(水害)
寛政十一	99	8・14より雨ふり出し夫より雨風しきりにて8・1819大風雨、洪水にて山路村人家へ水上ゲ、手前屋敷へも水上。又9・7にも洪水。10・5山潮洪水にて所々山つえぬけ、山路村小川の水大洪水。田畑共損田數ヶ所有。過分の大痛。翌申ノ春、御普請御割付夫(出役)夥數掛り山路村の夫高四千式百五人六歩掛り、地下御普請取御積夫も式千余ニ候へ共、勤残しニ相成、夫料銀八百匁余御普請方へ納入申候。右賃銀一人ニ付	8・14より雨ふり出し夫より雨風しきりにて8・1819大風雨、洪水にて山路村人家へ水上ゲ、手前屋敷へも水上。又9・7にも洪水。10・5山潮洪水にて所々山つえぬけ、山路村小川の水大洪水。田畑共損田數ヶ所有。過分の大痛。翌申ノ春、御普請御割付夫(出役)夥數掛り山路村の夫高四千式百五人六歩掛り、地下御普請取御積夫も式千余ニ候へ共、勤残しニ相成、夫料銀八百匁余御普請方へ納入申候。右賃銀一人ニ付	文化九	12	8・2~3洪水。8・22~23大風洪水(水害)	
				文化十二	15		
				文化十三	16		

年号	西暦	記	事	年号	西暦	記	事
文政四	21	7月洪水(目代) 洪水義捐米三石二斗九升一軒ニ付三升宛(木戸)	7月洪水(目代) 洪水義捐米三石二斗九升一軒ニ付三升宛(木戸)	弘化二	45	5 風雨出水(宮崎)	
文政五	22	5・29夜より大風雨。6・2大洪水(水害)	5・29夜より大風雨。6・2大洪水(水害)	弘化三	46	3 大雨度々出水。6・16大風雨出水。19日夜迄大雨、出水。7・1より風雨、三日風雨甚しく出水。八日又雨風激しく、九日益々甚しく人家數多破損、十七日夜、大風雨。此年数度の洪水にして俗に「丙午の洪水」という。(水害)	
文政九	26	5・21大風雨洪水。田畑損傷(水害) 宇和屋・吸田屋義捐記録あり。	5・21大風雨洪水。田畑損傷(水害) 宇和屋・吸田屋義捐記録あり。			7・9四ツ時(10時前)より大風になり九ツ時(正)より鎮守拝殿、幣殿、祝詞屋大破。尤本殿少しも不レ破、御神徳奇妙也。可レ恐々々。(八幡宮) 於幡多郡、潰家千二百十七軒、粒毛四千石余損。且畑物并御普請所等に至る迄傷。此時の風は西程強、宿毛辺別て強(下略)(略記)	
文政十一	28	8・9幡多郡大谷村颯風甚敷。人家破損多し(宮崎)	8・9幡多郡大谷村颯風甚敷。人家破損多し(宮崎)			5・1頃より大雨、5日迄降り続きで出水。7・9大風雨。夜に入り尚止まず出水。7・10五ツ時(午前)より大風雨にて四年前の午の年(弘化)同様に北東の風強く樹木を吹倒せり。同11日も北東の風にて出水せり。9・11の洪水は平地(小姓町)より高	
文政十二	29	5・23大風雨(宮崎)	5・23大風雨(宮崎)				
天保五	34	8・6大風(宮崎)	8・6大風(宮崎)	嘉永二	49		
天保六	35	6・23前夜より大風雨。閏7・5より6迄大風雨、昼頃やむ。又西風大いに吹く。同26大風雨洪水(水害)(木戸・義捐記録あり)	6・23前夜より大風雨。閏7・5より6迄大風雨、昼頃やむ。又西風大いに吹く。同26大風雨洪水(水害)(木戸・義捐記録あり)				
天保十三	42	6・3~4。洪水。所々大破。同24洪水、先の水より七、八尺ばかり大なり。作物被害甚大(水害史)	6・3~4。洪水。所々大破。同24洪水、先の水より七、八尺ばかり大なり。作物被害甚大(水害史)				

年号	西暦	記	年号	西暦	記	事
嘉永三	50	9・2 東風・夜分微雷大風、家々破損 (水害史)	嘉永六	53	8・4 大風雨出水(宮崎)	
安政元	54	此年は盆に大風雨。盆祭は不出来。市中は上町辺水揚る。(上岡)	安政四	57	7・29 大風雨出水(宮崎)	
安政五	58	7・13~14 大風雨洪水(宮崎)町口築地の辺位にて相濟(む) 後川は道路、上町は紺屋長藏辺位(上岡)	万延元	60	5月中屢々風雨出水(水害史)	
文久二	62	5・1 風雨出水(宮崎)	慶応元	65	1・6 雷雨出水(安政五年以来の水なり)	
慶応二	66	6・29・7・1 甚雨出水、8・7 甚雨、西風激しく黍・稻大損傷・凶作(水害史)	明治三	70	9・7 風雨。8出水。古老云「此度の水は嘉永二酉年以來なり。」と。然れ共同年に比較すれば一・二尺はさがるべしと思われ(水害史)	
明治六	73	8・29 風雨出水。難破船多し。10・3又				

年号	西暦	記	年号	西暦	記	事
明治九	76	風雨出水(水害史) 10・31夜 甚雷雨。中筋川・後川の川筋等山崩れ多く没家、圧死者多し。耕地の被害又甚大(宮崎)	明治一七	84	8・25 大風。雨はげしく添ふ。作物大傷み。(宮崎)	
明治一〇	77	8・21 洪水。	明治一八	85	7・1 暴風雨出水。各地方堤防破壊し家屋橋梁流失。田畑損害、死傷多し。(宮崎)	

明治十九年の風水害

明治十九年(一八八六)八月二十日午後七時頃より東北の暴風雨となり、翌二十一日益々猛烈を加え、正午頃より水量増加し午後二時頃には家屋への浸水となり、戸々の家具・木材・器具等の流失おびただしく、午後六時風はようやく衰えたが水量は更に加わり、午後七時となって漸く減水が始める。午後五時の水量は四万十川で平水より二丈九尺五寸(八・九四尺)の増水で、明治三年九月八日の洪水より八尺三寸(二・五二尺)、嘉永二年七月九日の洪水より凡そ四尺五寸(一・四尺)の増水である。不破では住家五~六戸、角崎で住家一戸その他雪隠・既の流失数多であり、郡下の被害甚大である。町内の水量は上町本町筋で座上三尺~四尺余、京町筋の高い所でも座上一尺以上の所もあり、下町、下々町(本町)は大低三尺より四尺ばかりに及び、上(中)丁は少しく高く二尺より二尺五寸ばかりである。(これによって旧京町より中ノ丁がやや低いことがわかる。)

上岡利太郎の手記にも(日付の違いはあるが、記事は詳細である。)
「明治十九年春夏迄は至って順調にて作類一切宜敷事なり。麦作豊年。七月二十一日より暴風、廿二日甚激風雨。朝は川(後

災害編

川)より二尺程。早き水にて朝九時頃坂井(現本町四丁目)へ来り、十二時頃内(自家)の庭へ来る。(本町一一七一番間も無く座に上り云々。諸品大いに浸す。水早く是迄も此様な水はなしと老人も語。)

二番水。八月十三日別而暴風強く、瓦のとぶこと実に木の葉の如く、隣木村酒蔵(山崎康寿氏)倒る。六尺大桶・小桶大破。市中破れ家数十軒。新町は家々の事なり。二番水は座より五寸上る。不破八幡宮大杉倒る。右山堤防切れる。諸山大木倒る。

三番水。八月十八日夜より十九日午後五時迄風雨。水は上町鍛冶屋方太郎(現本町四丁目北角)辺なり。

四番水。又暴風。八月二十七日より益々風雨激しく廿八日午後五時頃迄。水は上町浜屋利太郎方(現本町四丁目中)迄、都合四度の暴風雨。

実に本年の如くなるはこれなき趣。八十余の老人より承る。新聞を見れば奥州北国も洪水を見る。此時岩崎堤防切るる斗り也。堤防は畳を以て防ぎ山土を以て数人参る。坂峠、水こす斗り也。堤防を抜けたる水、子供の小便の如く飛ぶ。危ふし。

米麦私底と相成り高知より汽船を以て取寄す。下町、京町米商は商業盛んに行はる。下町は川滝(四万十川の沿線、佐田あたりより上流川崎へん迄を言った)の船、上り下りに売り捌き事市の如く、塩の売れし後は追々布団売れる。皆村々は米を流す、浸す。諸品を流せる家多し。実は大変なる洪水なり。余(その他)は筆にも尽し難し。

とある。文中「子供の小便の如く」は決して誇張ではなく、昭和十年大洪水でも、今の堤防下に住する野村義晴氏からの聞き書であるが、「同家の手押しポンプは一つも動かすことなく水がドンドン流れでて実にうす気味悪いものだった。近所のポンプも皆そうだった。」と述懐している。

これは外水と内水の高低差による水圧のためであり、既に切れる寸前にあり、もし切れれば万治二、寛文六の大洪水の如くいわゆる「中村は野(ん)なる。」は明らかで、これを救うためには右山堤防をきることによって、内水を高め高低差を少くする以外に方法なしとし、監獄の囚人で決死隊を編成し、山伝いに右山に行かせたが到着前に既に切れていたという。

岡村憲治氏の右山小誌に、右山堤防の切れた水勢につき「水勢のホコ先は安並の方にまでのびて耕地や人家に大きな被害を与えている。」とあり、更に「濁流がゴウゴウと音をたてて流れたと伝えられ、ここを流れたと思われ高岡郡仁井田のお宮のお輿が安並に流れついている。」とある。

右山堤防は明治二十八年右山地区民総参加による延一万千五百人役と多額の費用をかけて明治二十八年春復旧工事が完成しており、更に明治三十三年補修工事も行われている。詳しくは同書参照。

また右山、土居亀太郎の記に「明治十九年七月二十一日大洪水。太平寺石だん十八階、同八月十四日迄四度の洪水の所八月十四日暴風雨、宮林其他山林の大木みなたふれ、田地悉く荒地となる」とある。

九月十日の風水害「九月六日午後より降雨、七、八両日は降り或はやむの天候で九日頃から東北風(町民これを北東風といふ)吹き起り雨あしはげしく既に出水三・四尺に及び、十日の午前となって風勢愈々猛烈となり先月廿一日の風雨とほぼ同様であり、各戸家財諸道具を高い所にうつし、荷揚げに忙殺した。夜になるにつれ雨勢風力共に益々猛烈となり、瓦をとぼし壁を破り、樹木をたおしその勢の強烈な中を老人、子供を避難させるに大混乱をきわめた。十一日午前一・二時頃風力、雨勢漸くくじけたが、出水は更にまして床下へ、座上に達した所も多く朝となって更に出水度をまじしたが正午頃ようやく減水のきざしをみせ、夕暮には次第に減水することとなる。

今回の風水は先月二十一日に比較して更に強烈で弘化三、嘉永二の暴風雨と同じく、町内外共潰家或は半潰夥だしく、中村町役場、旧県立中学校、裁判所人民控所など倒壊し、その他屋根をはがれて住居にたえない家は数え得ない程であったという。農作物の被害は云う迄もなく、各戸米穀、衣類その他家財をことごとくぬらし忽ち飢餓に迫るの状態である。

このとき不破八幡宮では鳥居をはじめ、もと長宗我部元親が戦勝祈願のため植付けたと伝えられる並松(なんまつ)の名大木は大部分倒れた。ともあれ「当年は如何なる凶年なるか前後大小四回の出水暴風にかかり、諸作物は皆無同様

となり、住家倒潰九十一戸、流失四戸、大破二十二戸、建築物の倒潰三十三軒、同大破七軒。」(風水害史)と記載されている。

明治二十三年の洪水

当年は初夏以来風雨極めて順調、諸作物は近来稀な豊作で、既に稲刈りもすませた村もあり、中村町・後川村・大川筋村も刈入れを始めていた。九月九日(旧七月二十五日)午後三時頃より降雨始まり、十日となって雨やや激しくなるも時々はやみもあつて洪水の前兆とは思われなかったが、夜に入って微雷しきりになって雨あし激しくなり、十一日(二二〇日)となつて豪雨物凄く、渡川、後川の水量もまし、やがて京町(現一丁目)迄も浸水する。

この時風次第に西に廻り天ようやく晴たけれど水は次第に増加し、日没時には十九年の洪水より既に一尺余をこし、階上にあげた家財道具もぬれる始末、家屋、家財その他流失するものも多く人々は神社、山の墓地床などに野宿する者も多い。

夜九時十分満水となり以後次第に減水を始め十二日朝迄には大部分の退水となる。人々は家に帰ってみれば家は跡方もなくなつたもの、壁おち柱傾いて修理の途なきものなど数多くの罹災者を出しており、中でも悲惨なのは、一家一族計九名が小船で避難の途中本町三・四丁目角で東へ押流され、現京町三四丁目角の水勢でついに顛覆し九名全員死亡し、また土居式の後山が崩れて神宮奉斎殿本殿が倒潰し、一少年庄死する。

上岡利太郎手記に「七月二十日頃より毎度雨有、廿六・七日に至り大洪水となる。實に是迄にかような水害・人いたみは中村には二百年前か、万治二年(一六五九)岩崎堤防切れ中村町流れ、其次は丑寅洪水(享保六(一七二一)七月五日)とこの廿三年の洪水を三番目に当るといふ。(中略)座より四尺五寸(本町三丁目一三六号)揚る。拙者共此の

様な洪水には出合わざる也。倒家数々あり。昼夜至急に荷物を揚げる。命限りの仕事なり。十九年の水には大損害なれども廿三年は幸いに損害少し。田畑は多く損害なり。平水(後川)より二丈余(約六畝余)」

土居亀太郎日記には「(前略) 太平寺石だん二十一階(水かさ) 田畑不残荒地となり、老ヶ年以上拾ヶ年以下の免租となる。」とあり、太平寺過去帳に、「中村町之内不破岡本某妻クメ、同家寄留水野音平(田ノ浦の人) 岡本某右三名は前夜来の降雨に屋後の山半腹より崩壊し数尺の下に埋没せしを村人五日間余相集り漸くにして死体を掘出して葬式を挙行するを得、此日罹災を蒙むりしは吾檀中にて古津賀邑に男女三名、佐岡邑に老名、併せて七名なり。然して幡多郡中にて庄死流死等凡そ六十余名と云ふ。(下略)」とある。

この災害について村長西村閑は次の報告を提出している。

明治廿三年洪水被害表

種目	数	食料請願者
田 損地	八拾六町三反壹畝廿貳歩	五百四拾四戸(内百五十八戸許可。三百八十六戸出願中)
畑 損地	七拾町 三反八畝廿八歩	二百六拾九間半
麥 死人	拾三人	貳拾貳間
麥 死人	拾三人	三百三拾五間
本家流失	四拾五戸	六艘
同 全倒	拾參戸	用惡水埋レ込 三千六拾間
同 半倒	拾參戸	溜池埋レ込 四ヶ所
同 大破	貳百七拾九戸	右之通ニ候也
土蔵納屋雪隠流失	百貳拾戸	明治廿三年十一月一日
己家掛料請願者	五拾八戸(内五十二戸許可。六戸請願)	幡多郡中村長 西村 閑

明治二十七年より昭和二年に至る風水害

年号	西歴	記	年号	西歴	記
明治二七	1894	暴風雨。 7・9 台風 七月四日より七日迄降雨。 六日午前一時より東風となり次第に暴風雨となつて九日午前四時になつて風勢やう衰え、八時頃東南風に転じ十一時風ようやくやみ、十二時雨もやむ。町内一〇九戸をのぞいて残り全部浸水、平水より二丈九尺五寸(八・九四m)715mm以下の台風 同年八月廿八日 720mm位の強い台風、午後三時頃より降雨。同四時頃北又は東風起り、同五時半頃南風に変じ強風大雨となり、同六時西風に変ずると俄然暴風雨となり、同七時頃に至つてやむ。風勢の激しいことは十九年の暴風よりも激しく如何に強い壮者も殆んど通行することができず。積の小石も豆を投ずるが如しとある。全倒戸数六六戸、半倒三六戸、大破七二九、非住	明治三三	1900	家全倒九二、半倒二八、大破五一七とあり、更に中村尋常小学校倒潰と中村町長高添朝治より郡役所に報告されている。 以後四十年史のおかげを蒙ることが多い。 台風(水害史その他) 八月二三日朝沖繩の東、二四日九州西を北上した七三八mmの台風、低速のため雨台風となる。雨量二三日大正二五〇、榊原三九九、二二〇二五日大正六〇五、榊原七九〇。(渡川改修四〇年史) 九月七日 台風、高潮 この台風は北西進して七日夕方宮崎に上陸、以後北進した七三〇mmのもの、雨量六〇八日榊原四八八、大正三九九、中村一四三。(四〇年史) 七日午前八時頃より降雨、加えて東風おこり、十時頃暴風雨となり数時
明治三二	1899	7・9 台風 七月四日より七日迄降雨。 六日午前一時より東風となり次第に暴風雨となつて九日午前四時になつて風勢やう衰え、八時頃東南風に転じ十一時風ようやくやみ、十二時雨もやむ。町内一〇九戸をのぞいて残り全部浸水、平水より二丈九尺五寸(八・九四m)715mm以下の台風 同年八月廿八日 720mm位の強い台風、午後三時頃より降雨。同四時頃北又は東風起り、同五時半頃南風に変じ強風大雨となり、同六時西風に変ずると俄然暴風雨となり、同七時頃に至つてやむ。風勢の激しいことは十九年の暴風よりも激しく如何に強い壮者も殆んど通行することができず。積の小石も豆を投ずるが如しとある。全倒戸数六六戸、半倒三六戸、大破七二九、非住	明治三五	1902	〇の台風、ゆるい速度で大雨の時間がのびる。雨量四〇八日榊原七四三、大正五九七、中村二九〇(四〇年史) 九月六日、午後十二時頃より暴風雨、同七日午前四時風やむ。南東の風、雨は二日午前五時より八日午後十一時に至る。当町浸水家屋約五百戸、平水より二丈余。町の高地である京町・中ノ丁、市の辻辺迄も床下浸水。 八月十五日 台風(水害史、治水) 雨量は十四日〇十五日榊原五九二、大正五二二、中村二七七(四〇年史) 数日前より風雨を催おし、天候に異状をきたし、十四日午後十時より暴風雨となり、翌十五日に至り益々猛烈を加え、同午後十一時満水し浸水全町に及ぶ。家屋の流失全潰一四戸、破損約一千戸、床上浸水八百余戸、床下浸水約二百戸、平水より二丈六尺五寸(八・〇三m) 九月廿三日 台風(水害史、治水) 県の東部海岸をかすめて北上した七〇〇mmの大型台風。雨量は二〇〇二三日大正

年号	西歴	記	年号	西歴	記
明治三六	1903	六月下旬からの梅雨は七月へ続き、八・九日大雨となる。八日の雨量中村三三八、窪川三〇五(四〇年史) 翌八日豪雨となり九日午前五時にやむ。浸水家屋五〇戸、平水より二丈一尺増(六・六m) 八月十六日 台風(水害史、治水) 天草から別府を通過して十七日朝呉に進む。七三五mm。十六日雨量榊原三三七、窪川二四七、中村一九六。(四〇年史) 十六日午前二時卅分暴風雨となり、午後三時二十分やむ。風向北東より南西に転じて終る。平水より二丈三尺五寸。(七・二二m) 九月七日 台風(水害史、治水) 九州の西岸から山口県へ北上した七三三五	明治四四	1911	〇の台風、ゆるい速度で大雨の時間がのびる。雨量四〇八日榊原七四三、大正五九七、中村二九〇(四〇年史) 九月六日、午後十二時頃より暴風雨、同七日午前四時風やむ。南東の風、雨は二日午前五時より八日午後十一時に至る。当町浸水家屋約五百戸、平水より二丈余。町の高地である京町・中ノ丁、市の辻辺迄も床下浸水。 八月十五日 台風(水害史、治水) 雨量は十四日〇十五日榊原五九二、大正五二二、中村二七七(四〇年史) 数日前より風雨を催おし、天候に異状をきたし、十四日午後十時より暴風雨となり、翌十五日に至り益々猛烈を加え、同午後十一時満水し浸水全町に及ぶ。家屋の流失全潰一四戸、破損約一千戸、床上浸水八百余戸、床下浸水約二百戸、平水より二丈六尺五寸(八・〇三m) 九月廿三日 台風(水害史、治水) 県の東部海岸をかすめて北上した七〇〇mmの大型台風。雨量は二〇〇二三日大正
明治三八	1905	六月下旬からの梅雨は七月へ続き、八・九日大雨となる。八日の雨量中村三三八、窪川三〇五(四〇年史) 翌八日豪雨となり九日午前五時にやむ。浸水家屋五〇戸、平水より二丈一尺増(六・六m) 八月十六日 台風(水害史、治水) 天草から別府を通過して十七日朝呉に進む。七三五mm。十六日雨量榊原三三七、窪川二四七、中村一九六。(四〇年史) 十六日午前二時卅分暴風雨となり、午後三時二十分やむ。風向北東より南西に転じて終る。平水より二丈三尺五寸。(七・二二m) 九月七日 台風(水害史、治水) 九州の西岸から山口県へ北上した七三三五	大正元	1912	〇の台風、ゆるい速度で大雨の時間がのびる。雨量四〇八日榊原七四三、大正五九七、中村二九〇(四〇年史) 九月六日、午後十二時頃より暴風雨、同七日午前四時風やむ。南東の風、雨は二日午前五時より八日午後十一時に至る。当町浸水家屋約五百戸、平水より二丈余。町の高地である京町・中ノ丁、市の辻辺迄も床下浸水。 八月十五日 台風(水害史、治水) 雨量は十四日〇十五日榊原五九二、大正五二二、中村二七七(四〇年史) 数日前より風雨を催おし、天候に異状をきたし、十四日午後十時より暴風雨となり、翌十五日に至り益々猛烈を加え、同午後十一時満水し浸水全町に及ぶ。家屋の流失全潰一四戸、破損約一千戸、床上浸水八百余戸、床下浸水約二百戸、平水より二丈六尺五寸(八・〇三m) 九月廿三日 台風(水害史、治水) 県の東部海岸をかすめて北上した七〇〇mmの大型台風。雨量は二〇〇二三日大正
明治四〇	1907	六月下旬からの梅雨は七月へ続き、八・九日大雨となる。八日の雨量中村三三八、窪川三〇五(四〇年史) 翌八日豪雨となり九日午前五時にやむ。浸水家屋五〇戸、平水より二丈一尺増(六・六m) 八月十六日 台風(水害史、治水) 天草から別府を通過して十七日朝呉に進む。七三五mm。十六日雨量榊原三三七、窪川二四七、中村一九六。(四〇年史) 十六日午前二時卅分暴風雨となり、午後三時二十分やむ。風向北東より南西に転じて終る。平水より二丈三尺五寸。(七・二二m) 九月七日 台風(水害史、治水) 九州の西岸から山口県へ北上した七三三五	大正元	1912	〇の台風、ゆるい速度で大雨の時間がのびる。雨量四〇八日榊原七四三、大正五九七、中村二九〇(四〇年史) 九月六日、午後十二時頃より暴風雨、同七日午前四時風やむ。南東の風、雨は二日午前五時より八日午後十一時に至る。当町浸水家屋約五百戸、平水より二丈余。町の高地である京町・中ノ丁、市の辻辺迄も床下浸水。 八月十五日 台風(水害史、治水) 雨量は十四日〇十五日榊原五九二、大正五二二、中村二七七(四〇年史) 数日前より風雨を催おし、天候に異状をきたし、十四日午後十時より暴風雨となり、翌十五日に至り益々猛烈を加え、同午後十一時満水し浸水全町に及ぶ。家屋の流失全潰一四戸、破損約一千戸、床上浸水八百余戸、床下浸水約二百戸、平水より二丈六尺五寸(八・〇三m) 九月廿三日 台風(水害史、治水) 県の東部海岸をかすめて北上した七〇〇mmの大型台風。雨量は二〇〇二三日大正

年号	西暦	記	年号	西暦	記
大正三	1914	<p>八月十五日の洪水と大差なし。 九月十四日 台風(治水) 午前六時前清水南方海上で転向してすぐ上陸した七四〇mmの台風。雨量は梶原一九七、窪川一八九、中村一六〇(四十)死者三、重傷二、住家全潰三四、半潰三七、大破四七、流失一、非住家全潰三四、半潰三七、大破二一、後川橋流失。 九月八日 台風(高潮)(治水) この日、日中九州中央を速く北上した七一〇mmの台風、三日より連日の雨、梶原附近では六八日各日二〇〇mm以上で、台風関係の総雨量は九〇〇mmを越すほどで風雨が強い。六八日雨量中村一六〇、大正三六三、梶原六〇二(四十)七月十二日 台風(高潮)(水害史、治水)豊後水道を北上した七二〇mmの台風、十二日朝までに二日連続の大雨となり、梶原附近では七〇〇mmを越える。九日～十二日雨量梶原七〇〇、大正四〇四、中村一七一</p>	大正四	1915	<p>五月二六、梶原四七一、中村四三二(四十)連日の降雨であったが、二十二日午後二時より大雨となり、同日午後十一時卅分より翌廿三日午前一時三十分に至り最も猛烈をきわめ、午前六時五分全町に浸水、道路、堤防等の破損、家屋の浸水流失多し。昨年</p>
大正七	1918	<p>八月十五日の洪水と大差なし。 九月十四日 台風(治水) 午前六時前清水南方海上で転向してすぐ上陸した七四〇mmの台風。雨量は梶原一九七、窪川一八九、中村一六〇(四十)死者三、重傷二、住家全潰三四、半潰三七、大破四七、流失一、非住家全潰三四、半潰三七、大破二一、後川橋流失。 九月八日 台風(高潮)(治水) この日、日中九州中央を速く北上した七一〇mmの台風、三日より連日の雨、梶原附近では六八日各日二〇〇mm以上で、台風関係の総雨量は九〇〇mmを越すほどで風雨が強い。六八日雨量中村一六〇、大正三六三、梶原六〇二(四十)七月十二日 台風(高潮)(水害史、治水)豊後水道を北上した七二〇mmの台風、十二日朝までに二日連続の大雨となり、梶原附近では七〇〇mmを越える。九日～十二日雨量梶原七〇〇、大正四〇四、中村一七一</p>	大正三	1914	<p>八月十五日の洪水と大差なし。 九月十四日 台風(治水) 午前六時前清水南方海上で転向してすぐ上陸した七四〇mmの台風。雨量は梶原一九七、窪川一八九、中村一六〇(四十)死者三、重傷二、住家全潰三四、半潰三七、大破四七、流失一、非住家全潰三四、半潰三七、大破二一、後川橋流失。 九月八日 台風(高潮)(治水) この日、日中九州中央を速く北上した七一〇mmの台風、三日より連日の雨、梶原附近では六八日各日二〇〇mm以上で、台風関係の総雨量は九〇〇mmを越すほどで風雨が強い。六八日雨量中村一六〇、大正三六三、梶原六〇二(四十)七月十二日 台風(高潮)(水害史、治水)豊後水道を北上した七二〇mmの台風、十二日朝までに二日連続の大雨となり、梶原附近では七〇〇mmを越える。九日～十二日雨量梶原七〇〇、大正四〇四、中村一七一</p>



明治44年8月中村の大洪水(忠魂墓地山より東望)

年号	西暦	記	年号	西暦	記
大正九	1920	<p>(四十) 七日午前十一時より降雨。八日午前一時より洪水となり、十一日午後七時より暴風となり、十二日に至り風雨やむ。本年は別に八月廿八日～三十日迄一回、九月四日午後四時より十六日に至る暴風雨、洪水あり。浸水戸数約五百余戸、諸作物の被害甚大。平水より二丈二尺五寸(六・八二m)八月十五日 台風(水害史、治水) ゆっくり土佐湾を北西進して足摺から上陸した七五〇mmの台風、豪雨となり、特に県中央嶺に多く三日間で一、〇〇〇mmを越えた。雨量十三～十七日梶原四九五、大正六一〇、この災害復旧に要した起債の償還は長い間地方財政を圧迫している(四十)八月十四日午後四時頃より降雨、十五日正午頃豪雨となり、大雷鳴絶間なく、十六日午後四時頃水は絶頂となり、北京町、西下町、中ノ丁一部、南京町一部をのぞいて全戸浸水。今回は中村町の被害は全潰四、流失一、田畑一一町歩、桑園五六町歩、橋</p>	大正七	1918	<p>梁流失二(後川橋(紺屋町北)久栄岸橋)であったが、幡西、以南地方の惨状は甚しく特に宿毛町松田川堤防が決潰して人家の流失、人馬の溺死が多かった。郡下の罹災範囲は三十ヶ町村に及び人畜の死傷二百を越え、家屋の倒潰流失四五〇に及ぶ。時に小生中学二年、大雷鳴は地ひびきをたてて大地をふるわせるものだ…と知ったが、それが自分の腹のしんへひびきわたるような感じでこの世の地獄のような恐ろしさの極みであったことが強く印象に残っている。また翌朝、石見山の七合から八合目にかけて随分広い間「つい」(山崩)がきて赤肌をさらしているのを知り驚いた。この山崩で死者六名と重傷四名、山路下木戸では三戸九名の死者、間崎見善寺谷でも十数名の死者を出し、その他各所に多数の人家がおし流され、多数の死者を出したと聞かされ今更のようについの恐ろしさを知ったことだった。</p>

年号	西歴	記	事	年号	西歴	記	事
昭和六	1931	雨量二十七〜三十日中村二五九、大正三七六、梶原四四八。水位、具同換算、三十日六時九・六七m(四十)二十九日より三十一日朝まで暴風雨、洪水となる。京町、中ノ丁、天神橋、下町以外は浸水。後川橋は橋上四尺の浸水。 十月十三日 台風(町史治水)	昭和三年洪水	昭和七	1932	九州四国を掠め、和歌山南方で上陸した七三五mmの台風。非常に速かったので短時間強風の被害となる。具同最高水位六・九二m(四十)八月十二日 台風四国沖で九日〜十六日停滞、十一〜十三日雨量具同三四〇、大正四六七、梶原	昭和三年九月十五日大洪水(土生山より北望)

年号	西歴	記	事	年号	西歴	記	事
昭和九	1934	八七六、具同水位十二日十九時七・六八m。前年十月応急復旧であった東山村・後川村の仮堤防決潰(四十)年史 九月二十一日 室戸台風(高潮) 奈半利町に上陸した大台風、室戸で観測した最低気圧(海面)六八四・〇mm(五時)	昭和十年八月二十八日台風			十分)は陸上の値としては空前のものであり今も破られていない。台風進路が東偏しかつ速く通過したので暴風雨時間は短かく大被害は安芸に限定された。十八〜二十日雨量一七九、窪川三一〇、梶原三三八mm、具同水位二日二時七m四五(四十)年史	

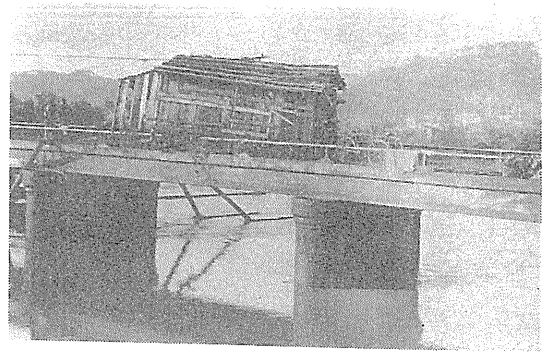
昭和十年八月二十八日台風

台風発生以後上陸迄について四十年史には「八月二十日朝サイパン島の東、トラック島の北、それぞれ八百料の海上に発生し、一、〇二三mb内外で西進しつつ急速に発達し、二十二日夕刻から進路を北西に変え速度もかなり速くなり二十五日朝には南大東島の東南東四百料の海上に達し九九三mbとなる。この頃から時々小雨が降り始める。その後台風は速度はかなり遅くなり、二十七日夜半には九七六mb内外となって種ヶ島の東百料付近に達し、二十七日進路を北にかえて北進をつづけ、二十八日十五時清水付近に上陸した。」とあり、二十七日以後の動静について風水害史には「八月二十七日奄美大島を襲った台風は、進路を北東にかえ二十八日午前にはその中心は宮崎市の東方海上にあって七二八耗を示し、極めて緩慢な速度で北々東に転じ更に方向を東寄に転換し播磨灘に出たため、渡川地方は暴風雨の襲来をうけ、未曾有の大洪水を惹起したものとあり、以後の雨や雨量などについて「二十七日午後八時頃より降り始めた雨は翌二十八日午前一時頃より漸次その度を増すと共に風速も加わ

災害編

り、午前十時具同村渡川改修事務所において雨量一七六耗に達し、風速十八米の大烈風となり、午後風雨更に加わり、気圧は益々低下して、午後四時七二三耗となり、瞬間風速三〇米、最大平均二二米を突破、雨量も更に増加して三二〇耗を示し、平水位をこす七米の増となり、その状態誠に凄愴そのものと言えよう。」とある。

この増水は明治二十三年(一八九〇)以来のもので具同量水標では二十八日午前七時三・七〇メートル、爾後一時間に最大二・三メートルなどと急増し、翌二十九日一時最高二・〇七メートルに達し、渡川改修計画高水位を越すことが約四二秒であった。二十九日高水位表は次の通りである。



佐岡橋上にすわる小屋(昭和10年8月大洪水)

位置	改修計画高水位		昭和十年八月廿九日高水位	計画水位との差
	一五〇二	一七〇七		
渡川 佐田量水標	一一・六五	一二・〇七	(+)	一〇・四二
川 具同	八・五一	九・七三	(+)	一・二二
筋 井沢	九・六〇	一〇・三一	(+)	〇・七一
後川筋大用寺量水標	一〇・〇五			
中村 中学校	一〇・〇八			
中村 高等女学校	一〇・〇九			
中村 尋常高等小学校				

旧町内への浸水は後川改修堤防未完成部分(下の方)よりの逆流によるものであり、渡川より約二階ひくかったが、これは岩崎堤防の完成により本川(渡川)よりの浸水を免れたもの(町風水)とある。

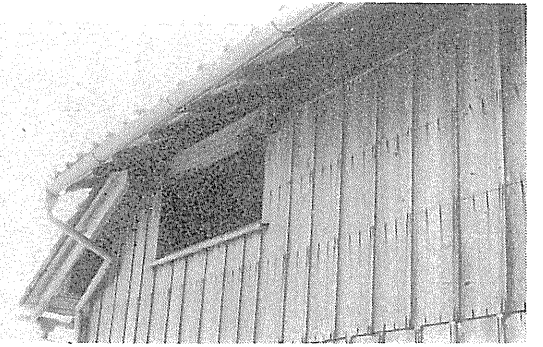
浸水は二十八日正午、後川沿岸の耕地を呑み不破は県道に迫り、午後二、三時ごろには宮田小路、南京町、新町方面を襲い五、六時迄には築地の一部を残して全町を浸した。その水勢は物凄く天神橋筋をはじめ東西に通ず

る街路は奔流となつて歩行はもとより救助船の往復も困難をきわめ、荷揚げの暇を与えず、夕方には既に全戸の床上を浸し、やや低い所は既に二階数尺更には二階天井にも及び両川岸の百笑、不破、右山、角崎方面は文字通り大海のようであった。

渡川では鉄橋々台の上を洗い、濁流は築地坂を越し、後川堤防は余すところ一拵足らずの危機に頻した。実に歴史上の最大のものか、浸水というよりは水没という言葉があてはまる惨状であった。二十九日午前一時をすぎてようやく減水を始め、夕方までには全町の退水をみた。次のような被害報告が記録されている。(四〇年史)

被害		全潰		桑	
浸水面積	三六〇ha	半潰	二〇九	園芸農産物	六六反
罹災世帯数	一、六五〇世帯	床下浸水	一五〇	其他蔬菜	三〇反
同家族数	七、二四三人	床上	一、五〇〇	計	一、二九八反
負傷者	六〇人	階上	五〇〇	一、農用地	二反
道路破損	二、五〇〇米	一、農作物			
水路	一五〇間	水 稻	五七八反	畑 田	二〇〇反
商品類	約七〇万円	陸 稻	八反	道 路	一三〇間
家財類	約二二万円	甘 藷	九五反	水 路	一五〇間
		果 実	二六反	堤 防	一〇間
		柳	六〇反		
建築物	住家	非住家			
流 失	二二	一〇四			

渡川改修四十年史には旧町内の状況を要約して次のように記している。「逃げられた者は舟を用いて二階から救出したが、その数々千名に達するという。町内は築地を残して全部浸水し、約一、九〇〇戸のうち十六戸を残して浸水した。」とある。



窓の立非常難水

今回の洪水は増水きわめて早く荷あげの暇が少なかったため被害が殊のほか甚しかった。これは町民が洪水に慣れて浸水の要領を心得ていたため、従来町内浸水の順序は、町内排水溝の水位に対し、後川の水が高くなると、上町頭の排水閘を閉鎖するため、まづ小姓町や上町西裏などの低地を浸し、ついで後川の水が上町、紺屋町、南京町などに浸入域を拡げ、最後に京町、中ノ丁の高所に及んだのであるが、今回は治水工事で南部の一部未完成によって従来と逆に南東部から急流となって押寄せ瞬くまに京町、中ノ丁の高所を越して市街の西部へ流れこんだもので、天神橋をはじめ東西の通路は瀬となって全戸を浸した。

その年筆者二十八才。大洪水となる……と予想して午後一時頃現本町四丁目西裏の従兄の家の荷あげを手伝い、ついで同三丁目の伯母の家で荷あげ、あらかた片づけて午後五時頃（不正確）現本町一丁目北横町を京町へ帰るに、既に水の深さは自分のへソあたりであり、逆進することは大変なことだったことをまざまざと想いおこす。帰ってみると家は敷板が浮いており、僅かしか荷あげができず、前記従兄の家は荷あげしたまま全水没であった。

水害後には実に悲惨を極め瓦ははがれ壁はおち、電気はつかず水道はとまり、悪臭、生乾きの敷板に荒蕪などしいて雨をしのぐ人々、水びたしの無数の畳、家具、商品、家畜の死体が散乱する街路、さながら地獄を想わせる図であった。

交通・通信も杜絶し救助を求めることも容易ではなかった。しかし一刻の猶予も許されないので、幡多支庁お

よび町当局は危険を冒して職員を佐賀町に強行させ、県に食糧、その他物資の廻送方を願ひ、罹災者の飢餓と救護に備えた。一方新聞社は飛行機により、或は特派員を派遣して惨状を全国に速報して義捐金募集を行い、郵便局員及び交通業者は不眠不休でその機能の回復に全力をつくし、郡下各地青年団、婦人会、消防組等の団体や有志者は各自の罹災を顧みず、競うて整理や救恤に来援され、また皇室からの御下賜金をはじめ全国からは十万円を突破する義捐金が寄せられた。こうした御厚誼によって災害後の安堵を得たことは永久に忘れられない感激である。なおこの大災害については昭和十三年六月刊行の中村町風水害史を参照されたい。

ともあれ満水は夜中であり、しかも低地では二階の天井・屋根裏を切り開いての脱出の家も多いのに一名の死者も出さなかった事は多年の実地訓練の賜か、全くの驚異である。

昭和十年大洪水以後の主な風水害

台風銀座といわれるこの地方の事として、その後も殆んど毎年のように洪水禍は繰り返される。渡川改修四十年史により簡単に左表としたい。但し次の二件を特出して後載したい。○印は建設省関係の被害記入あるもの。

- 1 昭和三十八年八月台風九号
- 2 下田の河口狭塞のこと。

洪水

年月日	区別	m b mm	中心進路	具同水位	被 害 等	
13. 7. 28~ 8. 2	11 強 台 風	710 mm	土佐湾西岸沿い北東進	日時 11日 14時	水位 8m	有印 そ の 他
8. 1日 17					8m35	

洪水

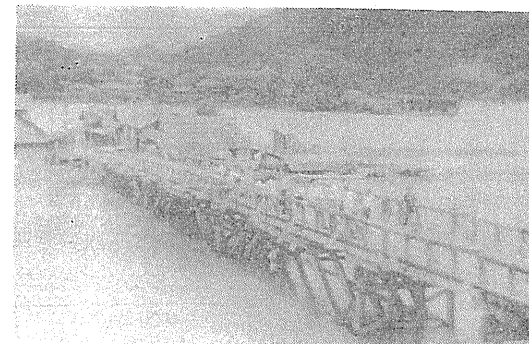
年月日	区別	m b mm	中心進路	日時	具同水位	有印	被害等
27.6 23	台風二号	970 m b	四国沖を北東進				被害少
26.10 14	台風十五号	927 m b	枕崎上陸広島へ	15 8	6m48		
26.8 17~22	台風(中型)十一号		沖繩を経て東支那海北西進				
26.7 1~2	台風(中型)六号	976 m b	宿毛、清水間ニ上陸 県内縦断(衰弱)	2 9	7m35		
25.9 13	台風(中型)二九号		志布志湾上陸、九州縦断	14 3	7m85		中村町泥海
25.8 13	台風一七号(小型)		足摺南を経て沖ノ島通過の小型	14 11	4m66		
25.7 28	台風(中型)九号		鹿児島西岸北上のち西進	29 20	6m20	○	
25.5 26	大雨(低気圧)		四国南岸を東進	27 17	4m68		
25.5 2~3	大雨(低気圧)			3 19	6m68		
24.8 15~17	台風九号	960 m b	志布志湾上陸	16 13	5m14	○	
24.6 21	台風二号			21 13	5m00	○	
23.8 26	大雨(熱低)	1000 m b	沖繩方面から九州西方をまわる	26 18	7m20		中筋川大洪水

年月日	区別	m b mm	中心進路	日時	具同水位	有印	被害等
22.7 20	大雨						
21.7 29	中級台風	960 m b	豊後水道北上(昭和10年来の大洪水)	29 22	9m8	○	長期雨中筋地区浸水
20.10 10	阿久根台風	955 m b	枕崎台風の西よりコース	10 21	6m82		
20.9 17	枕崎台風	910 m b	枕崎上陸北進、米子へぬける	18 4	8m25	○	
19.9 17	台風	960 m b	枕崎上陸、北東進	17 20	5m10		
18.9 20	強台風	933 m b	沖繩から北東進、清水上陸	20 17	8m10		
18.7 24	弱台風	992 m b	豊後水道北上	24 17	9m45	○	
17.9 21	強台風	947 m b	足摺―須崎沿岸をかすめ高松へぬける	21 24	6m10		
16.10 1	大型台風	960 m b	九州南沖より北上鹿児島より北東進	1 22	8m00		
16.7 25	豆台風	730 mm	豊後水道北上	25 —	7m50		
15.9 11	台風	960 m b	四国沖を北西進	11 17	7m00		
14.10 16	台風	720 mm	九州南部を掠めぬち東進、四国沖通過	17 11	5m32		

41.9 9	41.8 12~25	40.9 17	40.9 10	39.9 25	39.8 23~24	38.8 9	37.6 21	36.10 26~27	36.9 16	35.8 29	34.8 8	年月 日
台風一九号	大雨(台風 13号15号)	台風二四号	台風二三号	台風二〇号	台風(中型) 一四号	台風九号	大雨	大雨(低気圧)	台風一八号 (最大級)	台風一六号	台風六号	区 別
980 mm		955 mm	945 mm	930 mm						970 mm	970 mm	m b mm
九州東岸をかすめ伊予灘通過		室戸岬南方海上北東進	8・30安芸市上陸北東進	大隅半島經由、宿毛市北方角上陸 四国中央部北東進	枕崎上陸、瀬戸内へ	(後載)	前線四国ニ停滞	沖繩に発生、北東進瀬戸内へ	9時半室戸岬上陸北東進	14時宇佐附近上陸	九州・四国の南端をかすめる	中 心 進 路
9 24	16 2	17 18	10 15	21 11	24 20		22 6	27 3	16 16	29 22	8 22	日 時
5m59	6m78	6m70	7m20	7m08	6m57		4m02	7m99	7m54	7m25	6m52	具 同 水 位
	○	○	○	○	○				○	○	○	有 印
								中筋川はらん	中筋川、後川はらん	○ha 中筋流域冠水二〇		被 害 等

33.10 18	32.9 7	31.9 25~27	30.10 3~4		30.9 29~30	29.9 26	29.9 13	29.9 7	29.8 18	28.9 25	28.6 25~29	年月 日
大雨(低気圧)	台風一〇号 (中型)	台風一五号	台風二三号		台風二二号	台風十九号	台風十二号	台風十三号	台風(中型)五号	台風十三号	梅雨前線大雨	区 別
		960 mm	970 mm		940 mm	970 mm		950 mm	964 mm	930 mm		m b mm
県を東進	九州南部より四国北西部通過	26夜土佐沖北東進	豊後水道北々西進		サツマ半島上陸、九州西岸北上	大隅半島上陸、急速北東進	まれな大型台風	大隅半島東岸上陸、大分↓山口	九州南部上陸、宿毛、宇和島間ニ 上陸、県を横断	四国南方海上北々東進		中 心 進 路
18 16	7 16	26 12	4 12		30 14	26 15	14 6	8 9	18 15	25 15	27 2	日 時
4m37	7m92	5m90	7m70		7m38	6m55	8m88	4m69	7m16	5m72	6m04	具 同 水 位
			○									有 印
												被 害 等

43.9 24~27	43.8 24~29	年月 日		
台風一六号	台風一〇号	区 別		
	980 m b	m b m m		
鹿児島県北西部ニ上陸熱低となる	サツマ半島上陸豊後水道北々東進	中 心 進 路		
25 13	29 18	日 時	具 同 水 位	
6m12	6m63	水 位		
	○	有 印	被	
		そ の 他	害 等	



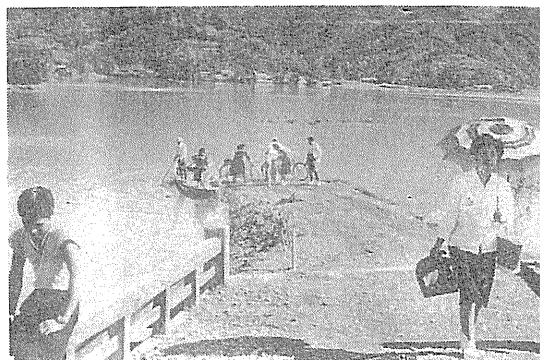
昭和30年9月30日台風22号（後川橋より安並をのぞむ）



昭和30年10月4日台風23号（後川橋より北望）



昭和32年9月7日台風10号（後川橋）



昭和36年10月 大雨（安並）



昭和38年8月10日台風9号（古津賀観音寺風景）

昭和三十八年八月九日台風九号

洪水

高知新聞九日記事に「八日午後三時、台風九号は北緯二九度三〇分東経一三三度〇五分にあつて毎時一〇キロメートルの速さで北進、中心気圧九六〇ミリバール、中心付近の風速四五級、高知気象台八日午前一時五分観測によれば、県下全域台風圏内に巻き込まれ、特に県西南部では九日早朝迄に暴風圏に入る見込。雨量は平地で百〜二百ミリ、山間部で三百〜四百と予想している。」

更に十日の記事では「台風九号は九日昼すぎ宮崎、大分県境付近から上陸、九州北東部または山口県西部を通

つて夜半には玄海灘方面にぬける見込。上陸後僅かずつ弱ってB級中型になったが、宇和島では風速四一・八級を記録、これに百〜二百ミリの大雨も加わって県西部の台風通過地域は大きな被害がでている。」

「四十万川・後川では同夜堤防ぎりぎりまで増水、このため両川にはさまれた中村市街地では水没寸前の危険な状態におちいり、一万市民は市役所や山際に避難、恐怖の一夜をすごす。午後九時四十万川の水位は堤防の高さ一二・五級にあと二級にまでに達し、しかもなお増水中。市対策本部でも砥園社前と向いの旧堤防（存している）間に土のうを築いて防備した。（筆者午後三時頃だったか水位を見に行ったとき既に砥園社西の道路側溝も殆んど満水に近かった。）

九日午後三時の雨量は東津野船戸で八一・二ミリ、梶原五五八、江川崎四六三、中村市一七一」と記録されている。また八月十五日の市長発の陳情書（要点抜萃）でも「降雨量は四十万川上流で九百ミリを越し中村に於ける最高水位一〇・四六級、死者一、倒潰流失家屋二〇数戸、床上浸水二、一〇〇戸余り床下浸水や半壊家屋、商店農

項 目		中 村 市	高 知 県
人的被害	死 者	1人	11人
	重 傷 者	52人	(不記)
	行方不明	0人	8人
建 物 被 害	全 壊	14戸	30戸
	半 壊	54戸	34戸
	流 失	11戸	31戸
	一部破壊	680戸	849戸
	床上浸水	2145戸	4635戸
	床下浸水	975戸	6678戸
	非住家被害	125戸	301戸
耕地被害	田 流 失 没	98ha	112ha
	畑 〃	66ha	
	田 冠 水	1850ha	15352ha
	畑 〃	420ha	
其 他	道路損壊	127カ所	167カ所
	橋梁流失	40カ所	73カ所
	堤防決潰	15カ所	67カ所
	崩土、山くずれ	66カ所	88カ所
	電柱倒壊	56本	(不記)
	木材流失	7000石	(不記)
	船舶流失	17隻	沈没 1隻
	〃 破壊	8隻	41隻
	罹災世帯数	3203戸	4729戸
	罹災者数	12800人	21092人

家の損傷を含めると無慮数千に及ぶ。中晩稲は幼穂形成期で洪水の為その七割は収穫皆無に近く、浸水を免られた地区でも暴風にさらされ幼穂期の稲は黒色を帯び、これまた収穫が危ぶまれる状態「……とある。附帯「被害状況表」と新聞記事による県内被害調査対象したい。（市より県が少いものもあるがそのまま記載する。）

古津賀堤防決潰

四十年史によれば佐岡、古津賀方面堤防破損について次のようである。「この浸水により佃・佐岡地区は一〇〇級、八四級の二ヶ所にわたり破堤、全地区（佐岡、古津賀）浸水し家屋の流出全潰は十数軒におよび、浸水家屋は二百戸に及ぶ。」とある。

但し佐岡堤防の一つは四時頃とも夕刻とも聞く。この堤防決潰で大浸水になった時活躍したのが前田健作君である。彼はその前年全長四・三一級のボートを自作し強力なモーターを取付けていた。

この日午後三時頃か、古津賀沖の堤防へ行くに、水は堤防の天場に五十センチ位となっており、内側斜面はブワブワで今にもくずれおちそうであることに無気味、決潰を直感した。

ボートが心配で旧切抜の向うの古津賀川へオートバイを飛ばす。内水で既に川は水一杯。舟のうみもやい綱をしめ直し切抜手前の友人宮下明義君宅に舟の機械をあづけ自宅に向う。宮下、農協間約三百級の間と覚しい所迄来た時、観音寺旧三叉路当りに二〜三級にも及ぶ高さの大怒涛が押し寄せて来るのが見えた。

とっさにUターンして全速で宮下宅の急坂をひきあげ、ボートをとり走りおける。

既に宮下の下の道には水があふれ、かろうじて舟にたどり着く。

幸いに綱を長くしていたのでボートは水の上に翻弄されていた。

さて切抜を登るとなると、狭い道路に濁流は東に急奔し、しかも刻々と増水する。やむなく北側の電線をたぐ

りたぐり時間をかけて漸くにして宮下宅に帰った時は水は既に上の庭の入口迄満水、ボートを庭先につける。其の間豚や鶏などが泣きわめいて流れ去る姿が今もまぶたに残るといふ。

ボートに機械を取り付け帰途につく。途中農協の屋根の上に助けを求めている数人を、それぞれの家に送り、更に当時聾学校の傍にあったNHK通信部の人々や聾学校職員合わせて十余人も屋根の上で助けを求めているので三回位で中森へ運び終った頃は夕闇もせまっていた。

四十年史には「旧下田町では浸水家屋四百軒に達し湛水時間三十時間と四十五時間」とある。翌十日も彼は午前市役所の下田現地被害調査に協力を求められ市職数人をのせて本川を下る。下りは僅か六七分で到着したが帰りは一時間を遙かにこしたという。強いエンジンなればこそ帰り得たもので普通のエンジンではとても上れないものという。二十才台の若さなればこそ、この無暴もあえてしたのであろうが、更に無暴を午後また敢行している。

NHKの要請で松山支局より三名の取材班が多数の機械を積んでの来訪を山田雁ヶ池迄出迎えである。NHKに縁故の深い福永雄彦君と二人で本川をようやくにして不破八幡宮の上手迄進め、本川の奔流を斜に横断して城山かみ手の瀬割堤防左岸につける。岸沿いに舟を進め本筋川に入るのであるがそこに予期しない難関が待っている。

本川の水が多少減少して中筋川の水の落ち口とは一桁余りの落差で物凄い勢で本川へ流れ込んでいる。全くの生命がけでこの落差を遡行し、かろうじて具同市営食肉センター前までたどり着く。本川横断以来一時間余りさすがに二人とも一言の言葉も発し得なかったと云う。

具同からは国道上を電線を目安として西進し山田雁ヶ池に着く。宿毛で一泊。翌日NHKの人たちや機械を満載して中筋川を下る。途中森沢の橋下五十坪位の空間しかなくボートは顛覆したが突差に機械を橋にほうり上

げ、川にほうり出された人も無事、再びボートを整え無事村に着く事が出来たが、今想出す度、そんなとすると云う。但し大事なカメラ二台を流失している。また濁流で浮遊物の多い中での運行にスクリーンに物が巻き着かなかった事が天の助けだとも云う。

それにしても古津賀では昼間の堤防決潰だったのに道路に人一人居らなかったとみえ、また急な浸水や家屋流出にもかわらず一人の死者もなかった事は不思議なくらいである。

のち彼は県警察本部より人命救助の表彰を受けた。

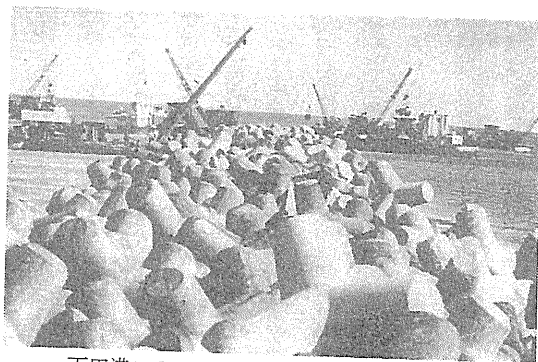
挿話的新聞記事を二例略記したい。

「市災害対策本部では最悪の場合には悲壮にも堤防決潰の寸前、角崎の水門を開いて市街を水びたしとし、堤防の破潰による人命を救助することを考えていたという。いづれにもせよ、今度の人的被害を最小限に食い止めたのは不幸中の幸い……」とある。

「バケツリレーで水源地を守り抜く。」の主題で、「百笑にある水源地は出水の水位からは一〇桁の下にあり、強い水圧でコンクリートのすき間から濁水が浸水を始める。量を増せば機能を失い給水不可能となる。安沢課長補佐、風部係長・片岡・友永課員の四人は備えつけの排水ポンプで必死の排水を始めるも何とも間に合わず六時頃よりバケツリレーの排水作業をすること実に十時間、すぐそばにある友永君の家は既に軒先迄水没しており、他の三人もそれぞれ家を顧る寸暇さえ与えられず、ヘタヘタになりながらポンプ室を守りぬいている。」

下田港口の狭塞

下田の港口は潮や風の変化その他の要因で狭くなったり塞がったりすることが往々あった。そんな時は豪雨のあとなど晴天となっても下田の町へ浸水騒ぎが屢々ある。航行の船舶泣かせの港口である。新聞記事から次の二



下田港口のテトラポット (昭和40年2月)

件をあげておきたい。

昭和二十三年(一九四八)七月六日洪水 午前七時最高水位七呎、中村町は陸の孤島となり早稲百五十町全滅とある洪水で、下田の港口について次の記事がある。「下田町は渡川河口閉鎖のため洪水時を気遣われていたが六日午前八時氾濫した渡川の濁水は役場附近で二呎余となり床上百戸、床下二百戸の浸水家屋を出し、三十呎余に閉鎖していた河口は砂浜の中央部五百呎が大口をあげ大洋へ決壊、滞貨していた阪神向け薪四万石、杭木千五百八十石、木炭一千俵など計二百二十五万四千元、発動漁船など二十隻、救助ボート一隻を流失した。」

昭和二十九年九月十三日襲来の台風十二号の被害 記事のうち下田港について、「台風十二号の置きやげ、大型機帆船もゆう／＼と題して次の記事がある。「下田港は河水の減少で一時は河口が約三十呎までせばまり、小型機帆船の出入にも危険を感じていた。これが浚渫のため一昨年浚渫船吸江丸が入港できず港口で沈没かく座れてきたところ、さきの五号台風で砂州が約四十呎流れ、今度の十二号が更に導流堤近く迄約四十呎けずってくられた。この結果河口から二百呎余に拡大され河口底に堆積した砂州も押し流され深さ八呎前後、大型機帆船が色々出入りできるようになった。総予算一億六千万円の大導流堤工事が台風のおかげで労せずして一挙に実現したわけ。(下略)」

渡川改修事業

有史以来暴君渡川及び附随の支流後川・中筋川の改修は関係地区民多年の願望であったがようやく機熟しその改修を目的として昭和四年(一九二九)七月二十二日「内務省神戸土木出張所、渡川改修事務所(一般には後半のみを言い、民間では更に治水と略称した。)」が設けられ、爾後五十年その間事務所名は変遷を重ねながらも、その道一筋に精進、やがて昭和三十九年度国道五十六号線昇格と共にその改修工事を併せ行うこととなり事務的な名も昭和三十八年四月一日より「建設省四国地方建設局中村工務局」となって仕事内容を拡張する。

当初の対象地域は渡川本流支流々域の旧中村・下田・東山・八東・具同・東中筋・後川の七町村であったが、の中筋・蔵岡などに拡張されている。

総合渡川史によれば、昭和四年治水発足以後「本年災害なし」という僅少の記事をのぞいては、殆んど毎年のように襲う洪水禍・台風禍であり、とりわけ昭和十年大洪水、二十一年南海大地震の超大型をのぞいても大小の災害の都度重大な損害を受けており、四十年史、年度別記事中「災害復旧工事」「補修工事」等の表題のつくものは多い年には二十カ所前後もある。とりわけ治水工事の最重要項目の一つである中筋川治水のための坂本瀬割堤防関係工事は初期から企画され、早く作業にとりかかってはいるが、洪水度に欠潰、破損と復旧を繰り返した記事の連続であり、前記「賽の河原」を連想させたものである。

水

洪

そんな土地柄、災害地なればこそ、県会などでも幡多を県より分離。見はなしなどの意見も出る。昭和十年大洪水後の十一月二十六日県議会速記録には尾崎治一県議の言をのせて、

「(前略)今回ノ県會議員諸君ノ中ノ或ル一人ハ、幡多郡ハ一ツニ切離シテシマツテ、何トカ別ニセヌト県ノ予算ガ持切レヌカラ、アレハ何処カニヤラウヂヤナイカト云フコトヲ言ハレテ居ツタヤウニ私ハ聞イタノデアリマス。(下略)」

災害編

とあり、更に佐竹晴記県議の同記録にも、

〔前略〕災害地ヲ何時迄モ何時迄モ復旧ト言ッテ見タ所ガ結局ハ財政ノ破綻ヲ来スノミデアリマシテ、如何トモ仕様がナイノデアナイカト思フ。大体颱風ノ通過地ハ決ッテ居ルノデアリマシテ、マア常襲的ト申シマセウカ災害地ハ大体決ッテ居ル。此常襲地トモ申シマス所ノ個所ヲ政府ノ直接管理ヲ願ヒマシテ（中略）住民ノ生活ノ安定ヲ図ルト言フコトハ出来ナイモノデアリマセウカ。〕

ともある。昭和四年（一九二九）以来既に半世紀、殊にはその前半は現在と違って経済的徴力の時代、資本力も機械力も貧弱な工事工法であり、（四十年史は工事機械変遷史でもある。）やがて事変・戦争期への突入によって工事削減が繰り返され、昭和十八年以降は殆んど全面休止的状况に追いやられ、更に敗戦後は国をあげて生きるための何どころではない時がつづき、続いては物資の欠乏に加えて工事予算額と支出全額とにバランスを失し、予期に反して進捗をみぬことも多く苦難の道をたどる。

こういう前半なればこそ改修事務当局を先頭に県・関係町村並びに関係地区住民の協力と努力の結集の連続になるものであり、お蔭をもって旧中村町大字中村・中村町を筆頭にその成果を享受しつつあるが、反面その犠牲となつて堤防の設けられない地区、堤外となつた土地、冷遇を予儀なくされた島などのあることも見のがせない。瀬割堤防功罪批判の声も聞く。中村町史には町内収用土地面積表があり、その中不破、右山を抜萃したい。下段に岡村憲治氏算出の犠牲の度合欄を附記する。

大字	地目	宅地	田	畑	犠牲の度合
不破	坪	八三八三二	四七四二二	三八二五三	約 68%
角崎		四七六九三	〇九一九	三八四一九	約 30%

昭和廿四年五月廿五日建設省渡川工事事務所報告

こうして不破では北海道集団移民も真剣に協議され、はては具同・右山・古津賀等へ耕地を求めて移住する者もでている。

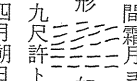
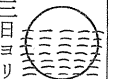
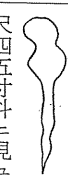
昭和十年大洪水の災禍は既に周知であるが後川右岸中村堤防完成後の洪水に於ては昭和二十一年七月台風により内水浸水五〇〇戸を数えるも爾後の記事に旧町内浸水記事少くなり、かつて毎年の浸水を経験した筆者らには正に隔世の感であるが、ともあれ治水の事業は有史以来の暴君渡川に対しての関係各当局及び地区民の挑戦とも受とめられるものである。

附 大旱・天体異状等

洪水や地震、火事以外の天変地異の記録は極めて少ないものである。宮崎文書から僅かにある記録を抜萃してみた。早魃については幡多地区のみとは言い難いことで、その他の天変地異はこの方面の研究に少しでも参考になればと思つて採録した。

早魃記事抜萃

年号	西曆	記	年号	西曆	記
寛永三	1626	四月ヨリ八月迄大旱	文政三	29	六月旱
元禄四	1701	四月ヨリ六月迄旱魃	天保三	32	六月十七日ヨリ久々雨不降、旱、作物大傷
正徳四	14	御國中旱魃	文久一	61	五月二二日ヨリ七月朔日迄雨降ラズ。天保三壬辰以来ノ旱魃、水続キタル村柄ハ稲却テ宜シ。
享保〇	25	三月旱魃、苗代大傷			
文化四	1807	七月旱			

年号	西暦	記	事	年号	西暦	記	事
享保三	1718	吾川郡古江掛敷小猿三所電マジリ雨降積ル事三時許。谷川洪水ノ如シ。					
寛保一	41	此年丑寅ノ間霜月ヨリ客星出(翌年三月迄)。星ノ形  如ス三四尺ト見へ、久シク見レバ九尺許ト見ユ。		安政三	1856	出。又夜半後ニモ出如クカカル。六月十三日ヨリ不レ出。二月十二日土灰ノ如キモノ降ル。	如レ此薄雲ノ 
寛保三	43	或人ノ記ニ四月朔日申ノ刻申西ノ間、下地ハ遠方ノ火事ノ如ク一面ニ赤ク空ニ立ニ日柱ナドト云様ニ赤ク、丈ケ五尺許ニ見ヘ戌ノ刻バカリニキユ。又或人ノ記ニ極月初マリ西ニ客星出長一丈許。		安政四	57	六月七日夜五ツ時奇星西ニ飛ブ、其形如レ  此、長サ四五尺斗、丈ケ一尺四五寸斗ニ見ユ。色赤ク黄色ヲ帯。スキ透タル如キ者也。甚下ヲ通ル様見ヘケルガ何国ニテ見テモ皆同ジキト云。同月十五日雷鳴驟風雨雹降ル堅キ事如レ氷、大サ大霰ノ如シ。此ハ下山郷バカリノ事ニテアリシヤ	
延享一	44	正月十一日頃ヨリ東ニ客星二月中旬迄出。		〃	58	八月十四〜五日頃ヨリ西ニ当ツテ学星出ツ漸々至大、光芒天ヲ照ス九月ニ入りテ消尽ス	
明和六	69	七月廿五日ノ頃ヨリ異星出、又九月ヨリ十月中頃迄出。		明治六	73	六月廿三日諸所雹降。大サ小茶碗ノ如シト。(以上)	
明和七	70	六月ノ頃ヨリ朧月ノ如クナル星出。初ハ中天ノ少シ東ニ出。次第北ヘヨリ宵ニモ					

火災

概説

中村三大禍の一つに火災がある。筆者少年の頃古老から火災の大きさや恐しさを屢々聞いたが、その割には記録が乏しくはっきりしない。以下県歴史年表(年表)、県災害史(災害)、宮崎家記録(宮崎)、小野家記録(小野)その他の資料によって火災史を綴りたい。

それらの記録で感じることには、(1)火災が極めて多く、(2)大火災が多い。ということである。その理由を次のように考える。

- (一) 昔は最ももえやすいわら葺・かや葺の家のみであって類焼しやすく、一たん火を発したらすぐに延焼する。風でもあれば一〜二丁位はすぐ飛火する。大正九年下田町串江の大火が自分達がみたその例である。
- (二) たいまつ・ろうそく燈火など裸火を光源としていることも火災の起りやすい要因である。
- (三) 消火器の不備、未発達も大きな要因。竜吐水という玩具のような消火器でさえ明治初期に出現したもので藩政期の消火能力は零に近い。
- (四) 水不足の中村である。前項水害史で感ぜられるように四囲水で囲まれた中村は水には恵まれ過ぎている程、

水は豊富であるかの如き錯覚をおこしやすい。それは一たん豪雨が降り洪水があったことで、洪水には恵まれていると言えようが、ふだんは全くその反対で水には恵まれないのがこの中村である。

以上昔の火災の多い四要因を書いたが、その中一より三迄は全国共通であるが、四は中村独自の理由で、そのため中村は特に火災が多かったと言えよう。

明治初年頃作の、次の中村風物詩がその辺の事情を端的に物語ってくれる。入野出身漢詩人上岡徹峯作。

七、八十家、一井を争い、

婢奴(男仕や女仕)水を擔いて、蹠で飛行す。

桔槔(はねつるべ)伏仰(下ったり、上ったり)間断(休む間も)無く

啣(きしめること)訶(きいぎいと文句をいうこと)晨夜(朝から晩まで)鳴く。

というのである。水道ができる迄の現本町、京町、新町住民の水くみ風景が僅か二十八字に見事にまとめられているものと感服する。

旧中村町には大正八年初めて水道会社が出来たものだが、それ迄は日常の飲み水は誠に不便なことで、新町筋・京町筋には飲み水に使えるような井戸は、現京町一丁目、信用金庫裏の井戸(当時は個人の私用井となっていた。)をのぞいて一つもなかった。現京町一丁目北角の私の家もしばしばポンプ井戸を掘ったが、そのつどにこった鉄分の多い悪臭のある水しか出なかった。ところが本町筋のしかも西側、道路から約二十分程入った所にはきれいな地下水の流れがあったものか、今の本町二丁目清水商店の南側西入るに通称「みま井戸」、三丁目南横町西入るに「し井戸」(新井戸の意か)、同北端現郵便局横町西入るに「上の井戸と言ったか。」があって、新町、京町筋、本町筋全住民の文字通りの生命の泉であり、「七、八十家一井を争い」は漢詩特有の誇張ではなく、これらの井戸での水くみ人は、朝から晩まで、この詩の通り走ってつめかけたものである。

娘・嫁・店員・女中・酒屋(京町二軒、本町二軒)の倉男等々、早朝、夕方の水くみラッシュアワーの風景は今も八十年配の人々の脳裡に深く刻み込まれているであろう。

当時水くみ専業の小母さん連中も居て大正期片荷一斗入り位のたごで三荷十銭(註、例、大正十年(一九二一)

米一升(1.8)と十五銭である)の水くみ賃である。随分高い水を飲んだものである。しかも夏の夕刻どきともなると店頭で散水をして呼ぶ涼味はこれまた随分高い納涼ともなっていた。こういうように防火用水の乏しさも火災多発の大きな理由であった。

記録にある火災の多い所は中村、ついで下田などで下の加江も多かったらしい。理由は大体同じことが言えうである。以下前記資料によって記す。藩政上半期の記事が少ないのは、火事がないのではなく記録が少ないためである。

火災年表

年号	西暦	記	年号	西暦	記	事
寛永九	1632	石見寺虚空蔵寺焼く。(中村市)	〃	〃	九	〃
寛文四	1664	9・18小間目浦火事(高新今日の歴史)	〃	〃	三	〃
延宝三	75	妙因寺焼失(中村市)	〃	〃	三	〃
延宝七	79	布浦民家五〇戸焼失(高新同)	〃	〃	二八	〃
同	79	11・8下川口浦五九戸焼く(〃)	〃	〃	三	〃
元禄四	91	高野山(坂本)出火、消火の事(小野)	〃	〃	三	〃
〃	96	9・20柏島大火(年表)一二六戸焼(大内町史)	〃	〃	三	〃
宝永六	1709	1・9下ノ茅大火一二九軒焼く(災害)	〃	〃	三	〃
享保元	〃	閏2・7宿毛大火(災害)	〃	〃	三	〃

享保六	〃 31	この年下茅・中村大火(年表)	宝曆二	〃 52	12・23中村大火(宮崎) 中村一五二戸焼失(年表)
享保六	〃 33	11・3蔵岡・海蔵寺焼失(中村史) 正月、下田浦中火災之節、家・蔵諸道具焼失仕、暫(こ)休甫手(酒造休業)ニ罷成(中略)中村酒取売仕候(商業経済史)、2・26下田浦大火(年表)	宝曆三	〃 53	中村御町火災(宮崎)
元文三	〃 38	12・16晩 下田浦火事八ッ(午後二時)より朝迄、掛屋・御分一、下代・御蔵式軒・米五千俵程焼失。(中略)惣分焼米郷中人夫以(こ)取除(小野)	〃 〇	〃 60	9・22昼四ッ(前一〇時)より九ッ(夜中〇時)迄下田浦火災。家数一七〇軒余。子供菅人焼死火本の子也。馬二匹焼死(小野)
元文五	〃 40	中村火災(宮崎)	〃 〇	〃 59	9・28下田浦一七八戸焼失(年表)
寛保元	〃 41	山分上山火事ニ付、百姓数々追放仰せ付けらる。(小野)	〃 〇	〃 60	10月竹島火災、家数三〇軒余(小野)
寛保三	〃 43	2・27寅ノ刻(前六時)竹島火事、本家六八軒焼失(小野) 3・4・下茅火事、家数六〇軒余(小野) 4・2宿毛町火災(宮崎)	〃 〇	〃 60	11・7夜四ッ(後十時)過より中村町火災。番所近辺より上の中西家迄。家数二百軒全焼失(小野)
延享三	〃 46	11・28夜八ッ(前二時) 山路火事、庄屋又□迄。但御貢物焼失、御代官御改之上、三ヶ年割払ニ成(小野)	明和二	〃 65	12・6夜(夜中十二時)江ノ村大庄屋(間崎藤作)本屋・表共焼失。其外部屋、蔵・□屋・馬屋共(小野)
寛延三	〃 50	7・1下茅浦火事(年表)	〃 〇	〃 65	6・12中村火災 伊勢屋・目代(この時目代は天神下地蔵寺附近にあつたらしい。)地蔵寺・下町へかけ類焼(宮崎)

明和四	〃 67	二六〇軒焼失。(宮崎) 中村に再度の大火有(年表) 閏9・5夜子刻(十二時) 山路村又衛門方出火。類焼なし。御貢物家財不(こ)残焼失。尤銀子は出す。銭巻貫六百匁焼候工共、通用相成(小野)	天保六	〃 35	二石八斗、類焼の者へ寸志(木戸) 白米四石八斗、正酒一斗八升欠着の夫江たき出し、わらち百足。(宇和屋(遠近)) 百五戸焼(年表)
安永四	〃 75	12・27夜 下田浦(青砂島)火事、角屋宇衛門せんちん(便所) よりもえ出し、安岡友仙より下、御分一迄。家数三百軒余類焼。(小野) 去年火災に家屋みな小屋がけ也。(西浦廻見日記安永六)	天保七	〃 36	11・20 具同村火災(奥屋内毛利) 米八斗寄付(木戸) 酒米一俵。正酒二斗寸志(宇和)
安永六	〃 77	1・24 中村大火。一四七戸焼失(年表)	天保三	〃 42	11・19 中村新町辺出火。二六軒焼失(宮崎) 一軒八匁ヅツ、二六軒寸志、小屋掛一軒寸志(木戸) 同年大浜浦火災寸志(木戸)
天明五	〃 85	月日不明 下田大火(西浦廻見日記)	嘉永二	〃 49	10・29 下ノ加江大火(年表) 家数一一七軒焼亡(年代記)
寛政七	〃 95	2・27 下田浦一三三戸焼く(年表)	天保三	〃 42	7・2 下田青砂島火災 金子三両寸志(木戸)
文化五	18 08	7・10 中村御足輕部屋(東下町)火災(宮崎)	嘉永二	〃 49	4月 橘浦出火(間崎)
文政〇	〃 27	2月大宮村火災。類焼者へ寸志(木戸間崎)	〃 三	〃 50	下田浦火災あり。(下田宇賀)
〃 三	〃 30	12月中村町郷火災之節、厚存込、類焼之者江寸志として飯米指遣わす(宮崎) 7日菅斗三升粥煮出(郷中人夫の支度) 8日米	安政元	〃 54	下田浦火災(同右)
			万延元	〃 60	註、いわゆる安政大地震あり、震災史参照 下田青砂島火災(小野) 金子参両類焼の者江寸志仕候(木戸庄之助)

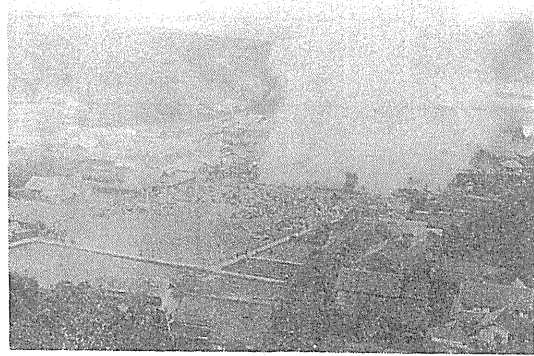
明治30	18 97	1・16 北京町（現京町一丁目）木戸分店（薬局）の南隣、中村馬次方より出火、木戸類焼（木戸）	ずる横町まで、西は築地、堤防迄の両側。大商店のみ二十余戸全焼。
明治36	19 07	6・3 夜西下町（現大橋通二丁目）南側西方から出火し、東は山手通から袋町へ通	9月（旧8・13）夜本町（現三丁目）東南角の裏から出火。雨上りの西風で東へ延焼、南側（二丁目）へも移り、中ノ丁西側の一部と二丁目の一部を焼く。類焼約十五戸。

って記載する。

大正七年ランカの大火 大正七年（一九一八）五月二十日午後五時過ぎ、南京町（現一条通一丁目）料亭小野

春（現田村履物店）の裏手の家より出火し、折柄の西風に火勢物凄く近隣に延焼、強風と防火用水の不足とで火勢は大きくなるばかり、見る見る中に十数戸へ延焼。しかも三十分後には用水全く絶え、その上電柱の倒潰で北側へも延焼、更に新町にも飛び火して一面の火の海となる。東西約三町、南北約二町を灰燼に帰して午後八時漸く鎮火となる。焼失家屋約八〇戸、世帯数は一五〇戸にも達している。時に筆者小学六年。物凄い火焰はただこわいの一語であった。

大正八年（一九一九）五月三日（下田串江）大火 午前八時頃下田町、下田小学校前の造船所より火を發し折柄の西の強風にあふられてたちまち小学校を全焼し、火勢は南、串江の方にのびるも消防団決死の努力で、貴船宮及び島村万三郎家及びその附近四〜五軒を守り得たが、当時わら葺の多かったため飛火、上記の下に延焼、串江最南端和田地区をのこして百三十



明治40年 西下町大火

余戸を焼きつくして午前十二時頃鎮火する。

大正十年（一九二一）新町中ノ丁の大火 四月二日午後九時頃、新町（現二丁目西側南より）当時のようじ会社から火を發し、小暴風雨のような大雨の天候ながら東風強く火勢猛烈をきわめ、当時の京町区の一部（現在の二丁目の南部）から中ノ丁（現二丁目北端）迄の両側大きな家約三十余戸を全焼した。

昭和二年（一九二七）一月三十一日下田青砂島の大火 青砂島、南北に通ずる大通りの東側裏通り附近より夕方火を發し、当初は無風なるもやがて西風強くなり東部（海浜方面）へ延焼し七〇軒〜百軒の住家を焼く。原因は灯明の火とも伝えられている。筆者は京町消防団に参加して応援消火にはせまじ余りにも広い地域の火の海に驚いた記憶がある。当時青砂島の全家屋三五〇戸位の由。

なおこの前後実崎でも数十軒焼失の大火あり。目下詳細不明。（筆者京町消防団で出動した記憶による。）

昭和二年三月十四日築地の火事 築地南側数軒焼失。消防団員一名殉職する。（築地は現大橋通一丁目）

昭和六年（一九三一）二月二十七日山際火事 午前四時頃山際（現山手通）南北道の西裏に火を發し、十戸を全焼、六戸を半焼して五時半頃鎮火。

同年十一月一日小姓町の火事 小姓町通称横山通り、五輪さん（一条房基を祭る小祠）と横山馬次所有長屋十一世帯を全焼する。

昭和二十一年（一九四六）女学校寄宿舎の火事 一月十九日午前九時頃、県立高女寄宿舎より出火。隣接の校長公舎と棟続きの炊事場、講堂等を瞬く間に焼き払い、校舎類焼一步手前で消しとめ、幸い本町への類焼もまぬがれた。終戦直後、物資欠乏の時であり、学校当局及び女学校後援会は寄宿舎再建その他爾後処置で苦勞をしている。（中村高校八十年史参照）

火

中村市消防署の集めた新聞記事による資料によって以後の主な火災を次表としたい。

昭和二十一年（一九四六）以降主な火災（市消防署資料）（主として新聞報道）（小火不記）

47. 8. 12	45. 8. 28	45. 2. 15	43. 2. 4	41. 12. 17	40. 12. 13	39. 12. 14	39. 4. 5	38. 11. 29	37. 11. 24	37. 9. 12	36. 2. 25	35. 10. 13
水戸	一条通一丁目	古津賀ウバガ谷の山火事	申江	（新町）一丁目（東側）	桜町幡多事務所（旧女学校）	水戸、工場	京町五丁目	八束中学	東下町	有岡、工場	山路	日ノ出町
前一時三〇分頃出火、四棟一六五㎡全焼	前〇時二十分頃、倉庫、別に半焼三棟、八世帯焼出される	昼前から燃え移る	後十一時半頃商家より出火、八軒十一棟七百㎡全焼失五日前一時鎮火	前五時一〇分出火計五棟全半焼	後七時四〇分頃、木造かわら葺二階建三百㎡隣接の建物合計八三〇㎡、一時間で鎮火	後六時四十五分出火、工場その他六棟三三〇㎡全焼、後七時鎮火	後六時二十分商家の工場より、出火住家九軒全半焼	前〇時五十分頃出火、木造二階建校舎、便所炊事、工作室計四棟（八八〇㎡）全焼、隣家二軒全焼	後六時二十分商家出火、五棟全焼後八時鎮火	前一時四十分頃出火、工場、事務所（二〇〇㎡）全焼、前二時二十分鎮火	農家より出火、四世帯六棟全焼三時四十分頃鎮火	前〇時半商家より出火アパートその他五棟十一世帯全焼
調査中	調査中		煙草の火不始末か	調査中	調査中	取調中	調査中	調査中	調査中	慰労宴残り火の不始末か	調査中	調査中
五百万円	一千七百万円			六百四十万円	五百万円	四〇〇万		約二千万円		約六百万円	二百五十万円	

30. 1. 26	29. 12. 27	29. 7. 13	27. 4. 1	26. 1. 26	25. 2. 11	24. 5. 6	22. 11. 28	22. 2. 28	22. 2. 27	21. 4. 26	年月日
紺屋町	本町通信診療所	於東町精米工場附近	南京町北側	中筋村役場	角崎、農家より	西下町、合同運送	上谷	山鴨川、藤ノ川	安並、石見山中腹より	紺屋町西側	場所
後八時十分頃鎮火	前〇時四十分頃出火、隣接五戸工場一棟計四百坪をやき、前一時四〇分頃鎮火	後十一時十分頃出火、新町南京町一条通へも延焼三六戸全焼、三戸半焼、前二時鎮火被災世帯五二戸	前一時頃出火、住家十五戸、非住家四棟全焼、半焼三あり、前三時十分頃鎮火	後十一時十五分出火、類焼三軒	一時半頃出火、七棟をやき三時鎮火	前一時五〇分頃出火ガソリン罐に引火連続爆発、東西に延焼住家九棟非住家五棟トランプ四台、半焼二、四時鎮火	後六時半頃出火四戸五棟全焼	前十一時頃出火、二十町歩を焼く後六時頃鎮火	前八時三十分頃発火、一里の円をえがいて、日前八時頃鎮火	午後十一時頃出火二十戸約三六〇坪全焼前一時鎮火	程度
たき火の不始末か	炭火の不始末か	モートルの過熱か	アベックの煙草の火不始末か	火鉢の火の不始末か	漏電か？	風呂場の火不始末か	コンロの火不始末		開鑿の火の不始末	かまどの火の不始末	原因
五百万円	二千万円	五千万円以上	損害三千万円以上	重要書類をやく六百万円		損害七千万円		三十万円	三百万円以上	二百万円	損害

47. 12. 7	中村中体育館	前五時三十分頃出火、鉄骨・平屋六四二㎡ 全焼、六時十五分鎮火	児童の火遊び (三十五年十月落成したばかり)	一千万円
48. 9. 11	大用中学	後十一時五十分頃出火、木造二階建、校舎 一棟(七七七㎡)全焼十二日前一時十分鎮火	調査中	一千万円
51. 10. 9	水戸	前二時四十分出火 工場(七〇〇㎡) 三十五分後鎮火		五千万円以上
52. 7. 23	実崎イ草乾燥場	後三時十分頃出火、附近住家など六棟全平 焼	乾燥用バーナーの異常燃焼か	
54. 2. 10	佐田	前三時十五分頃農家より出火 二家七棟全 半焼、同五十分鎮火	電気毛布の過熱か	
54. 3. 27	名鹿	前〇時五十分頃農家より出火、隣家を含 め六棟(三八〇㎡)全焼、前二時鎮火、主 人焼死		
54. 12. 2	中筋小学校	後二時〇五分頃出火、木造、平家建(七七 三㎡)半焼、三十五分後鎮火。中筋中、野 球部懸命のバケツリレーする。	調査中	
55. 3. 27	水戸、製材所	後十一時四十分頃出火、隣接工場へも延 焼、計五軒のべ一、〇八〇㎡全焼、前一時 二十分鎮火	調査中	一億円

地震・津波

概説

幡多地方は地震多発地と比較すれば、その発生回数は少いかも知れない。しかし、中村の場合は一たん地震が起った場合は被害がきわめて大きいという特徴がある。

それは中村が渡川・後川にかこまれ、かつて大古の時代渡川の水は分流して中村を流れていた事も考えられ、更に応仁二年(一四六八)一条氏下向以前は岩崎堤防の存在も考えられず、洪水毎に中村に流れ込んで沖積層を形成したとも考えられるが、渡川四十年史では「沖積層の厚さは中村市の中央部で五〇米以上、国見で三二米、有岡で二〇米以上と予想する。」とある。筆者は各地の沖積層の厚さを知らないので中村五〇㍍の位置づけを確認することができぬが、渡川の水が洪水毎に逆流していた国見や有岡でさえ二〇〜三二㍍の厚さであることに對し、中村がその二倍位であることを考えるとき中村の地盤軟弱を深く考える。

地震についての記録は少なくて古い時代の地震は殆んど書くことが出来ないが、藩政期となって宝永・安政の大地震があり、昭和二十一年南海大地震は既に周知の通りである。

代表的大地震

白鳳の大地震 これについては日本書記天武紀白鳳十三年十月の条に「伊予温泉、没(して)而出でず。土佐国田苑五十余万頃、没(して)海となす。為(して)海」とある。寺石正路の「土佐古今の地震」によれば「今日の寸尺に訳して三百四十四万坪、約一千百五十七町に該当す。即ち方一里未滿の地なり。これを今日土佐国の面積四百里に比すれば、四百分一位に当り、さして驚く程の数字に非らず。しかし一旦の地震に平地の田苑が方一里の面積、海底に没したりといへば、何にせよ非常の天変なり。」とある。陥没した地域はどこかは伝説区々に別れて定説はないが幡多地区でも入野沖その他伝説地は多い。

慶長九年の地震 近世当初の地震であるが幡多では資料未見である。山内氏入国直後のこととして記録のないのも無理からぬ。十二月十六日夜のことで引続いて大津浪襲来のよし。

宝永大地震 宝永四年(一七〇七)十月四日(午後二時頃か)におこった大地震で、震域は殆んど日本の南西

災害編

半分即ち西国・畿内・中国・南海・東海の三十余ヶ国にわたる極めて広くて、しかも激しい地震で、「土佐古今の地震」も「恐らくは本邦記録上に見ゆる最大の地震」とのべており、被害も極めて甚大であつたらしい。

同著によれば、「今回の地震も白鳳年度の大震に同じく、日本本島南部太平洋海底に一大震源地を有し沿海諸国に大震動を感じたるものにして津浪の打入、火山炎上、温泉の涸渇諸国に渡りて様々の現象を呈したりしなり」とあり、時刻を正午より午後二時の間、多分午後一時前後であらうとし、震度については、南路志に曰く、「人を転ずる事丸き物を投げ転ずるが如し。恐ろしきとも何とも途方あるものなし。」とあり、万変記に曰く、「諸人広場に走り出づるに五人七人手を取り組むと雖も、俯向に倒れ、三、四間の内を転じ、或は仰向になり、又俯向に成て逃去る事容易ならず。」とある。

この表現は大地震未経験者には誇張にすぎると感ぜられるかも知れぬが、筆者には決して誇張と思われず、それだけ地震は恐しきものであり、平素より心掛けておくべきものと思われる。更に地震後の津波について「万変記に曰く、未刻斗(ばかり)(午後二時)大地震ひ出で半時(ばかり)(一時間)計ありて沖より津波押入ると呼はり、間もなく跡(あと)より大津浪打入。」とあり、「南路志に曰く、地震やみ、少しの間ありて大浪打入。然らば津浪は大地震より一時間内外を経て押入りしものなり。当時津浪は沿岸の地、皆打寄せ来りし由なれど、記録に存ずる確実なるもの左の如し。」とあって各地の津浪状況と更に地震に伴う地殻の変化にふれて次の記がある。

「宝永地震は土佐国全体に在りて、東部は地稍高まり西部は著しく陥没の徴候を現せり。其実例を左に列挙せん。但大地震後二ヶ月ニ國人奥宮正明が物したる谷陵記は能く詳かに当時の有様を叙したれば、本章は便宜上これによって其の事実の記載をなすべし。」

とあって各地の被害状況、或は土地の隆起、陥没を説明しているが、せめて幡多のみは抜萃したい。上段の数字は記載番号である。

地震・津波

- (七二) 佐賀 亡所、潮は伊与喜の浜白石迄
- (七三) 井田白浜、亡所、潮は山迄
- (七四) 有井川、半亡所、潮は山迄、一宮親王古跡多く埋没
- (七五) 上川口、半亡所、潮は山迄
- (七六) 蛭川、潮は田丁下迄(たちようの)
- (七七) 浮津 亡所
- (七八) 鞭・口湊川 潮は山迄
- (七九) 入野、亡所、潮は山迄、北浜松林の中間に古より潮満来れば横二十間斗(ばかり)の江湾あり、高潮の後横四〜五丁の海となり、田丁六丁程上み浪打際となる。此村地高千三百石、谷々残る田島九十石。里人生業を失ふも、理(ことわり)なり。(陥1)
- (註、以下陥没地を想像させる記事ある地域に(陥数字)をつけてみた。)
- (八〇) 鹿持 亡所・潮は山迄、田丁は一面の浜になる。沙澳渺々として旅客津に迷ふ。(陥2)
- (八一) 田ノ口、潮は銅山の下迄
- (八二) 田ノ浦、潮は飯積の麓迄
- (八三) 下田、亡所、潮は山迄
- (八四) 鍋島・竹島・井沢・小津賀・潮は田丁。窪田は海となる。(陥3)
- (八五) 中村 地震に三分二家倒る。潮は田丁窪田迄。
- (八六) 佐岡、潮は田丁迄
- (八七) 右山、潮は田丁残なし。
- (八八) 坂本、潮は香山寺麓迄
- (八九) 山路、潮は田丁迄。木戸は家尽く流れ、窪田は海になる。(陥4)
- (九〇) 真崎、潮は山迄。田地不(のこらず)残。海になる。(陥5)
- (九一) 深木・間崎・津蔵測、潮は山迄。田地中(なかば)・半海になる。(陥6)
- (九二) 初崎、亡所、潮は山迄。一草一木残りなし。
- (九三) 下の茅、亡所、潮は山迄、浜より行程一里許(ばかり)の市井は海底に沈み、舸艦を多く繋ぎぬれば外記すべきなし。(陥7)

- (九四) (記なし久々か)、亡所、田苑一面の海となる。(陥8)
 - (九五) 大岐、亡所、潮は山迄。民家三軒残る。一草一木残なし。田苑は一般の砂浜となり、茫々乎として暗に胡園に遊ぶ。
 - (九六) 以布利、亡所、潮は天神山の峠五尺斗下迄。市井海に没す。(陥9)
 - (九七) 窪津、亡所、潮は山迄
 - (九八) 津呂・伊佐・松尾在所高き故無事
 - (九九) 大浜・中浜・浦尻、亡所、潮は山迄
 - (一〇〇) 清水、亡所、潮は越浦境の小坂を打越す。
 - (一〇一) 加久見、半、亡所、潮は山迄
 - (一〇二) 三崎、亡所、潮は山迄、田苑は一面の潮となる。竜串の奇石埋没す。
 - (一〇三) 下川口・片槽・貝ノ川・大津・小才津野・潮は山迄
 - (一〇四) 尾浦、西泊・榎浦・周防方・小満目・赤泊亡所
 - (一〇五) 柏島、亡所、家少し残る。
 - (一〇六) 天地・橘・泊・榎・小筑紫亡所
 - (一〇七) 湊、潮は田丁残なし。田苑海に没す。(陥10)
 - (一〇八) 宿毛、亡所。潮は和田の奥、牛ノ瀬川を限る。田苑は海に没す。(陥11)
- 右國中潮入在々所々山迄。打話たる潮三分一は速に減し、三分二は定潮となる。凡そ潮及ぶ所の田島は尽く永荒となり、餓
 拳野に満んとす。可レ悲。可レ悲。(餓拳ノうえ死した人)
- その時の被害について宮崎文書は次の数字をあげている。この数字は南路志記載と同数又は大同小異である。

国内大破損

- 一、死 人 千八百四十四人
 - 一、流失家 一万千七百七十軒
 - 一、潰 家 四千八百六十九軒
 - 一、破損家 千七百四十二軒
- 一、流失牛馬 五百四十二疋
 - 一、損 田 四万五千七十七石余
 - 一、亡所浦 六十七ヶ所
 - 一、亡所郷 四十二村

一、過チ人(けが) 九百二十六人

とある。現存する諸家資料によつて各地の状況を記載し今後への参考資料としたい。

一、山崩(ざんぶん) 山崩畑作穀類大分損失

まず下川口、亀井丈夫翁編「幡多探古資料」より全般的記事の中重要なものと中村市関係を抜萃したい。

〔前略〕此日空晴れて満天雲を見ず、且つ風なくして煙塵動かず、暑きこと夏の如く、帷子(かたびら)を着、單物(ひとえもの)を着する者もありたり。午前十一時の頃東南の方向にあたりて大なる音響あり。間もなく大地大震動を初む。

旧記の録する跡を辿りて考ふれば、海嘯は地震歎みてより後来りしが如く、且つ其間に多少の余裕ありたるものの如し。及べる区域は広くして且つ高く晝夜に亘りて襲来する事十三回、五日の晝に至りて漸く歇む。之がため人畜の死傷・家屋の倒壊、田園の荒蕪、其他船舶・米粟薪炭の流亡せしもの夥しく、沿岸村落の物件鳥有に掃し殆んど棲住に堪へざるに至れり。當時の言辞にて所謂亡所(いわゆる)となりたり。(中略) 変災録によりて幡多各村の被害状況を記せば左の如し。(現中村市の記事抜萃)

- 下田 亡所。潮は山迄、山際に屋見斗(みえるばかり)残る。家ハ少々アリ。
- 鍋島 潮ハ田丁(たちよう)まで。窪田は海になる。
- 竹島 上に同じ。
- 井沢 上に同じ。
- 小津賀 上に同じ。
- 佐岡 潮は田丁迄。家事(こと)なし。後川の潮は敷地の中沢・岩田の大境、大要寺の門前の堤下までいる。
- 中村 地震に家三分二倒れ、潮は田丁まで、渡川の潮は岩崎境脇田の池(わいた池)限り。
- 宇山 潮は田丁まで、津のさき境え三十端の船一船打上る。家は高き所故事なし。
- 津野崎 潮は田丁残りなし。家は上に同じ。
- 不破 潮は八幡の並松迄。家は上に同じ。
- 坂本 家は上に同じ。
- 山路 本村の潮は田丁迄。木戸と云ふ所は家悉く流る。但田は海ニなる。
- 実崎 潮は山まで、流家鮮(すく)なし。田地残らず海になる。
- 深木 潮は山迄。家は山間に多き故全し。田地中(なかば)半海となる。
- 間崎 潮は山迄。流家鮮(すく)なし。田地中(なかば)半海となる。
- 津蔵測 半亡所。潮は山迄。田地中(なかば)半海ニなる。
- 初崎 亡所。潮は山まで。一草一木なし。

とある。次に市内資料よりあげたい。先ず下田の状況をくわしくあげる「広恵簿」からである。

(下田) 広恵簿 (現代語訳)

災害編

「宝永四丁亥（一七〇七）十月初四日、未之上刻大地震。子の家の戸は自ら離れ、障子の骨も折れる。地の開く所（亀裂）多し。母を初め皆々門前に出る。此年母四十九才、予三十才、弟源七二十八才。此日病ミ、因ッテ兄弟共家ニ有り。母曰く「老母あり。安否を問へ。」と。外祖母である。叔父福永九右衛門は予の家にあって起つことができぬ。予は走り行き共に門前に集る。三刻（六時間）許りして大いに震うことはやむ。弟曰く、このような時は大潮が来ることもある。予もかねて聞いている。然る時は足弱の者を早く高所へ逃がすべしと。弟が外祖母を負い、家僕が母を負うて上の谷の竹藪に集まる。（以下、同居の親類など詳述するも省略）此時予は家にあつて当用の諸品を整理し、衣類・鋪物・綿・木綿・飯米等を家僕にもたせる。弟が帰つて来て、母が予を待つこと切であり、しかも潮は既に往還に近づいており、早く退くべしと。予も同感、脇差をもち、左懐へ御敵を入れ右懐へ父の位牌を入れる。弟が再びかえして来て潮のます事愈々急であるとせかす。さあ山の上へ逃げようと墓のある所まで来てふりかえると既に流れた家は川の中に満ち、嶋は既に没している。然るに伯父伝九郎正美と従々（またいとこ）兄弟正利の祖母がまだ来ないので弟を尋ねにやる。所がその祖母がどうしても家を出ず。無理にすすめるも聞き入れず。かれこれする中潮が大いに来て祖母は家と共に流れた。正美がふりかえつて老婆が引潮に流されるをみてこれを追い、鵜の渡まで行つてようやく追いつき助けた。二番潮が来て山に逃げ弟と逢い一同集まる。その夜は峰の横道に寝る。朋友江口治右衛門その他集まる者七十八人。青砂島（水戸）・鵜の渡（串江）は家悉く流れ、下田下夕町には残つた家が七十八軒、上八町や松野山は家流れず。」

「翌五日は潮は平静となるも財貨は悉く失う。時に流死した人老若二十七人。青砂島（水戸）・鵜の渡（串江）は家悉く流れ、下田下夕町には残つた家が七十八軒、上八町や松野山は家流れず。」

とあり、また次の記もある。

「（前略）食頃まで（夕食事か）大潮俄かに至り、雲奔り山来るが如く、平地より水高き事丈有五尺（約五米）。山有る所に至つて止む。大いに吞吐する事七々八回、民居蕩掃、溺死数を知らず。潮退て山に登つて一望すれば四望蕭条、一物の存するなし、（中略）幡多郡下田浦を甚だしとす。」

古津賀、土岐文書から
「然ルニ宝永四亥年十月四日之地震ニ即時海波興、流三人家、諸人横死、言語筆頭所不_(レ)及而、山川一時改_(レ)観。」
と古津賀の惨状をつたえ、山路小野文書には、
「十月四日晴天に成候所、俄、大地震、敷、事人家より乱れ、無_(レ)程大潮入。灘辺人家財宝八方へ流失大船宇山へ掛り居候。下々、村々ハ不_(レ)及_(レ)言、下田ノ浜松、山路村沢田へ来候。灘辺人・牛馬死スル者多、山路村木戸分へ潮入。御

賈物流失之事、尤、大潮ハ引候へ共、小潮ハ沢田へさし不_(レ)止候事。」
谷真潮旅行記から

この災害後約七十年を経過した安永七年（一七七八）五月（六日〜二四日）幡多旅行をした谷真潮が通路に当る佐賀、入野、福良、大津、三崎等で津浪の爪跡を記録（西浦廻見日記）しており、その中から興味をひく次の一つのみ抜萃しよう。帰りの入野の項

此社（加茂八幡）亥の大変に、ここの松林へ送葬に来りしもの、かへらんとするに大潮道ととり廻して帰ること能わず。此の社にげん入しに此社も三度の浪に、此のあたりを浮きてたゞよい流れしが三度ながら本の柱つばへすはりたり。されば其人も助かりしとぞ。

とある。

大海集から

また悪瀬々の住人榎木吉貞の著「大海集」にも下田の惨状を書いており、その中次の哀話がある。
「或る者人の妻とや。老人は我が子、一人は甥なるが、両手を引きて山の方へ逃る。引潮に木のかぶにもたれてとどまるに、兩人は留めがたし。時に我子をはなして甥を抱きとめけるなり。其頃の評判に義理をほめぬものなし。」

とあり、次の笑話も記されている。

「大塩入るとよびつき、津野川へ岩間よりよび、村の者山へ上りける。我等母飯米を荷にさせ、拵えて、父三亟貞行は寝て居たり。早く起き給へ、そらの山へ子供を連れてあがるといふに、父少もさわがず、下田より潮来れば与州の潮は山を越して来るべし。遁るる道なしとておきず。母申は夫と親を残してにげ命助かる子や女、世にあるうか、是非なしと止りけるが汐は来らず。後に大に笑ふぞ。歴々の人見るく山へ上る也。（下略）」

享保十年（一七二五）正月ニ七日子ノ上刻西南ノ間震動人民騒動、寅ノ下刻ニ終ル。此時日向桐島山焼ル（宮崎）

寛政十年二月 地震（宮崎）

文化地震 文化九年（一八一二）三月十日戌上刻（午後十時か）地震頗る甚だしく未曾有のことなり。

幡多・中村去る十日夜の地震、御城下よりは格別強がりし由。翌日まで十一度ゆり、其の後も度々震う由。（県災害史宮地日記）

安政地震 土佐における安政の大地震というのは安政元年甲寅（一八五四）十一月五日であるが、この年は翌二年と共に大地震が頻発しており、時には誤解・混同の恐れもある。これを列挙すれば次の通りである。

- (1) 六月十四日近畿大地震、被害甚大。
- (2) 十一月四日関東・東海大地震、地震地域十六ヶ国、津浪地域十四ヶ国余、大坂道頓堀でも大震災入、溺死七百余人であったという。震度大強、被害甚大、津浪災害多し。震源地は東海道沖。
- (3) 十一月五日 西日本太平洋岸大地震、地震地域三十国余。震度最大強。震源地南海道沖。（これが中村を襲った地震）
- (4) 安政二年十月二日夜、関東大地震。前年十一月四日地震とよく混同されるという。江戸の死傷・火災も多く、水戸藩士藤田東湖死もこのときである。

こういふように大地震が頻発し、国内大混乱をきたした事であろうが、当地方を襲った十一月五日地震が規模に於てその中でも最大のものであったようである。

さすがに藩政末期の出来事ではあるし、極めて大きな地震なればこそ、幡多にも比較的記録が多く残されており、手元に写させて貰っているものには、津波が特に大きかった大方方面で、(1)学者の安光南里著の「大塩筆記」及び「同筆記補」(2)伊田の医師小野桃斉著「大潮大変記」(3)入野の漢学者上岡微峰著「桑滄談」があり、大方方面それぞれの村の状況が克明に書かれており、更に宿毛方面資料も二、三写させて頂いている。

これに対し中村方面では目代家所蔵の「地震記録」はあるものの一般記録は概して少い。これは下田の津波被害が比較的軽少であったためであろうか。入野と下田間は距離僅少でありながら、宝永・安政では津波の大きさに大差があったらしく、それについての学者の見解の資料はまだ見ていない。

安政地震はこうして諸家の実況描写的記録となっているのに、のちの南海地震にはこういう記録が乏しく、後世の参考ともなろうかと思われるので主な所を写し、併せて地元資料も挿入しこの項をまとめたい。

木戸助八（中村）文書は地震前の長期にわたる天候などを書いている。

「右根元、大地震有に付、巷ヶ年前より昨□天氣も片行（片より）、可レ降時にも不レ降、諸事不順相統、天文者にも不審數多有り云々」

寅（安政元年）十一月朔日頃より海瀉大いにくるい下茅浦辺へはず浪四五日之間は折々入来る事有り。惣じて瀉くるい候時は、必ず変有と心得べし。」

とあり、大潮大變記には当日の波を「すずなみ」として、

「比は嘉永七甲寅年十一月四日午前七時極々微小の地震ありて漣（スズナミと）と言ふもの入来り、磯辺に干したる鱧或は芋の切干（きり干しなど）杯流るるとて騒動するに付て、すは漣といふものを見んとて走り行て暫時眺望する中、引いては来り、引いては来りすること四〜五度に及べり。次第に減じて止め。又其外何も変る事なく氣候暖和にて、恰も三月の如く、其の夜三更（〇時）の比又来ると見えて磯の音がう〜と云。依て大潮の前徴にてはなきや・中々油断ならずと諸人氣を付たるに、一漁翁云らく、余若年の比より漣と云ものに三度斗りも逢ぬ。強いて恐るべきものに非ずと云に、任せ何の用意もなす者なく、只暖和の天氣を喜び、所謂小春なるべしとて何の氣もつけざりけり。」

註、上記四日の漣は地震の前ぶれではなくて四日に起った関東・東海道大地震に伴う津浪の影響によるものではなからうか。

桑滄談（桑田変じて碧海となるの意で「大變動」のこと）から

「(前略)、先づ其日の次第逐一に熟観するに、其前四日の事なりしが、朝辰刻(前八時)小地震ありて長し。路上に有ける人、或は家に在るものども知らぬ者勝なる程の小地震なりしが、須臾にして海潮俄にふくれ上り、海浜に漲り上り、西は牡蠣瀬川（かきせ）の境一ばいに溢れ上り、東は吹上川に同じく然り。其潮濁りテ赤泥を解したる如きもの也。其夜もまた前の如く溢れ来るよし。浦々は浜に有漁舟或は綱（なと）杯を漂し、或は干物杯を流したるよし。我里俗是を余浪（すずなみ）と称す。余浪の名いつの代より呼びなすにや。其因を知らず。されども強て之を異とせず。中にも余浪を祥瑞などと云ふも有、以南布浦の里人は是必ず海漣（つなみ）の兆なりと。あらかじめ米穀着物などを山上へ持運び、逃支度等したるよし。後日に是を聞伝ふ。我郷俗は誰有て是を悟るものなく、たまたま古老の輩はたゞ事ならずと眉をひそむるもあり、中には怪しき事など言て、翌朝に至り海浜の模様を窺ひ出たるものありたれども、海辺常日の如く穩かなりたれば、何の苦もなく平日の如く銘々産業を営居たるに

其日五日申の下刻(後五時)果して地震はじまり初はゆるゆる震ひたるが次第に強くなりて我一面に逃出たるに劇しくなりて、瞬時に壁を倒し、屋宇を覆し、或は居ながら家に（おき）圧れて死るも有、逃出て後、他の家に打れ死傷するも若干也。平日

地震の強き時は地裂け水湧き山崩などの談は聞居たれども、如^(かくの如き)此地震まのあたりに逢ひぬるは、生来始めての事なれば其の怖しきこと、たとへんかたなく、老幼婦女は大声に号泣し、大家大木杯の崩れ落つる音天地に轟き、今や坤軸忽ちここに陥るかと思はれ、臆^(おそ)まり魂消て生きたる心地はせざりける。良^(や)暫しが間震動したるが漸々おさまりて初て人心地となり、夫々四方を望みたれば、可^(おしむべし)惜^(おぼやかし)葦屋高樓一宇も不^(な)残^(な)或は倒れ或は傾き一瞬の間に似も付ぬ^(ありま)形勢とはなりぬ。すはや今こそ津潮^(つなう)入来るべしと騒ぎたる。中には潮来るなどとはひがごとならんなど云ふ内、既に山上より声々に潮既に来れり、早く逃げ去るべしと口々にわめけるより、我もく米穀夜具の類を持運び、暫時に山上は人の市をなせり。我直ちに長泉寺の後の山に上り南をみるに、潮は既に田の口の堤をのり越へ、田丁へたぶだぶと進み来る。黄昏頃に至りて二番三番と追々と進み来り、就中四番の潮尤も盛大にして、直ちに家屋を漂流し幾かたまりとなく眼下になうくと流れ来る。其時はもはや六ツ半頃(後七時)頃也。家流るゝ毎にメリ／＼と鳴て其声夥し。東西より進み、浜の宮の後に合体し、左右に引き、都合七度進退す。進むは緩く退くは急也。人々は山上に在て只然歎するのみ。

其夜も五ツ頃(後八時)また強き地震一度、小地震五度もなし、平明に至る迄凡そ十六・七度も震ひける。各山上に火をたいて寒気を防ぎ、米杯用意せし者は泥水をもて炊き漸飢を凌ぐ。

夜半に至りて潮全く退て再び来らず。其翌六日夜の明を待て大方は山より下りて銘々の家に帰り見るに、或は跡方もなくなるも有^(り)或は倒れ臥すも有^(り)。たまたま家存するものあれども大半破損して一宇も全きはなし。東西の田丁は一面の海と成り、園圃は渺々たる白砂と成り菜蔬竹籬に至るまで枯萎し、或は根こげ杯^(など)になりて満目一点の青なし。皆々我家に残る米穀器物等を取上げ山に運び婦女は銘々我家の流れたるを惜しみ悲しみ泣叫ぶ形勢は目もあてられぬ次第也。追々山上に己家を営み銘々爨^(か)炊^(き)をはじめ漸飢渴を凌ぐ。其日も絶えず少々地震して人心付かず、其翌七日曉より雨を催おし、仮初の己家なれば雨漏りて寒気烈しく着用のまま逃去るもの杯^(など)は寒気にあたえず。またまた其の日九ツ頃(正午)大いなる地震して半潰の家蔵、是が為に倒るるもあり、銘々荷物杯取上げんと帰りたるものあれば、誰が云ふともなく、またく潮来るなどとわめきたるより取も取あえず色を失ひ又々山上へ逃去りける。其翌八日雨やみて北風烈しく雪を催おし、寒気いよいよ甚し。(下略)以上四日より八日迄の描写であり、これだけでも今後海岸地帯住民の参考すべき貴重な体験記録である。以下もまた長文で、終りの方には土佐国内と併せて幡多各地の被害状況を記しているが、その中注目をひく記事・中村市関係記事のみを抜萃したい。

○当日(宝永地震のこと)に比すれば、今度の津潮は余程軽しと見えたり。

○当郡も海浜残らず亡没す。第一宿毛・中村は潮は来らずとも地震に出火し両所とも九歩通り焼失、死亡数十人有^(り)。

○下田は潮不^(な)参^(ま)上^(り)し。

○山分筋は潮の愁^(うれい)なしといへども地震に山上の大石転落、怪我人多しと云ふ。

○かへすがへすも後々に鈴浪と云ふもの不時に溢れ来ぬれば、必ず津潮の前表(兆)也と心得安々油断あるべからず。

などである。以下中村所在の資料を抜き書きしたい。

○(前略)十一月三日地震仕り、五日大地震仕り、右山村家皆まろび、村々土蔵不^(な)残^(な)。大潮馬渡まで来^(る)。秋作は大虫はやり、すどうし虫くいつけ困窮。其上十二月一日大風大雨になり、地震少々つつ毎日ゆる。地われ申候。(右山・猿田文書)

○(前略)大地震中村町九歩通潰込の上焼失。(中村、伊与田文書、註。この伊与田家は松久屋と云い当時本町住、組頭をつとめていた。)

○(前略)、中村の潮は崩岸の川一ばいにて塩先き大用寺の下迄。渡川は築地の沖の瀬迄。家々相崩れ焼失家数数軒おしうたれ、人いたみ四五人、残り家山端に多し。市中一統に山々へ己家を打ち十日余り居申候。(これに中村の郷分、既に中村大庄屋所管の地域(町村制期の中村町大字中村)の災害記録)

○(前略) 当町人家大傷ミ、一条山のはづれ戎屋酒店(福永家、現京町一丁目西側北端角)より上ミの町、家不^(な)残^(な)かやり、人大いに死失有^(り)。尤もひさしに押れ、半死怪我人数多有^(り)。右戎屋酒店より下もは家もかやり不^(な)レ申^(な)、少しづつ傷にて死失なし。(中略)上ミ町分、家かやり出火と成。諸道具は申に不^(な)レ及^(な)、持金迄皆焼失に成。

右等の大地震百年に一度有^(り)之事に付、向々心得の為荒増記し置く者也。(木戸助八文書)

○(前略) 七日に又大ゆり。津浪入来ると言てハブ山へ家内中逃上る。一晚山にて夜明す。尤も津浪は参り不^(な)レ申^(な)、翌日皆々内へ帰る。上みの家焼失の人は、皆古役所(現小姓町)へ小家掛して当座住居。尤も一ヶ月程に家式くへ仮り立して帰る。(木戸助八)

などとあって次の地震心得三ヶ条を書いている。津浪関係にはふれていないが、今後も心得べきことである。

第一心得方之事

一、大ゆりとなれば早速釜の火を消し立出る事。右上ミ町焼失はうらたへ、火も其仮にして出たる故、跡にて出火となり、家

災害編

- 財・着類 □ 迄(残らず) 焼失に成もの也。
- 二、必ずく狭き小路へ逃出間敷事
此時小路にて家にしかれて死失の人多し。
- 三、ひさし軒下にて油断不(おいら)相成事。
ひさしにしかれ怪我人数多有故記也。
此三麻第一心得入用之事也。

目代記録 最後に目代文書について書きたい。

目代とは中村町の町分(町人居住地)の大庄屋相当職で、町分の町長に当る。姓は横田氏。この記録は「嘉永七年大地震記録、甲寅十一月五日(下略)(中村市指定文化財)」と表記しており、概略次の内容である。(1)各町別全潰・半潰・焼失別記名。(2)死亡者名と続き柄、原因。(3)罹災者の救助(御救己家急造一五〇戸と収容者名、救助米その他と義捐金品)。(4)郡別被害記録、その他である。諸報告書扣書類の一括したもの。記録が多いので(1)(2)の町別集計と、(4)の中幡多郡のみを抽出したい。なおくわしくは資料館備付の同書写しを見てほしい。

町別被害表 (記録により筆者作成)		() 書は蔵など別棟				
町名(旧町名)	全潰	半潰	焼失	死亡者	罹災者	
本町(本町)	三六(六)	二	一七	二二	二二七	
上町(南、北上町)	一九(二)	〇	一八	三	二三七	
紺屋町(紺屋町)	一七(二)	一三(五)	〇	一	二二八	
中新町(中ノ丁北半)	一〇	一一	一三	三	一五〇	
本新町(中ノ丁南半)	三〇(九)	一	三〇(九)	五	二八八	
京町(京町)	一四	二六	六	四	三七八	

今新町(新町)	下町(西下町)	計
一六	九	一五二(二八)
九(二)	四	六六(六)
五	〇	八九(九)
〇	一	二九
二三七	三七〇	二、〇〇五

欄干(ランカ)南側、御貸家住拾軒分潰
新町西側 御貸家六軒半潰、翌卯二月風雨之夜潰家ニ成ル

幡多郡

- 一、御普請処 八百五拾八ヶ所、御役御郡共間敷(およそ) 凡 壹万八千六百五拾貳間半
- 一、田役処、八拾六ヶ所間敷千八百四拾貳間
- 一、損田、五千九百四斗壹升九合、御本田新田給知共
- 一、潰家、六百八軒
- 一、半潰家千百拾貳間(軒)
- 一、焼失家、百五軒
- 一、流失家七百六拾軒
- 一、御米蔵八ヶ所潰込崩傷共

其 余 傷

- 一、船百三拾壹艘内拾三艘破損、百二十八艘流失(百拾八艘の誤りか)
- 一、網、六拾貳張流失
- 一、井流(ゆる) 四拾貳処破損流失
- 一、御分一家四軒内三軒流失

地震・津波

- 一、御高札場 四ヶ所
- 一、のろし場 壹ヶ所
- 一、遠見番所 壹ヶ所
- 一、死失 六拾五人
- 一、馬拾壹匹 死失
- 一、宮寺堂 拾三ヶ所潰込半潰共

- 一、砲台 五ヶ所
- 一、吉籾 千百六拾二石七斗流焼失
- 一、米八百四拾貳石壹斗七升 右同
- 一、麦百拾五石壹斗 右同
- 一、大豆貳拾七石五斗九升 右同
- 一、金五百貳拾貳両三歩 右同

一、八錢巻貫百四拾匁五分
一、小豆巻石式斗五升

流失
——
焼失
メ
一、蕎麦四斗

流失

筆者青年の頃は弘化・嘉永頃生れの老人が生きており、この地震に伴う奇談・哀話などを聞き書した。二―三記載しよう。

○連日の地震 今尚ふるい立つような大地震であった。旧暦十一月五日午後（丁度不破で見た太陽は西山に二―三尺位という時であった。）より引続いて一週間程ゆって、一日何十回もゆった。大震は五日と十二日とが最も烈しかった。

○京町焼（きやうちやき） この時（五日）有名な京町焼というのがあった。中ノ丁より火を発し京町西側戎屋（福永）の北隣にある雪隠を引倒しそこ迄やけた。（当時戎屋の北は井戸道と言って三尺道であった。）東側は鹿野屋（富賀）があり井戸があった（のみ水には使用できぬ）がどういふ関係か水を地上に吹き出しその水で消しとめた。

○白衣の神 戎屋の所はもと一条公の御殿内でこれがため白髪白衣の神が戎屋の屋根に舞いおりられて御幣をふられて火がきえた。

○木戸某家では倒木のため一家が死んだし、三好屋某家では子を助けようとした親が死んだ。

○鉄格子の家 鉄砲鍛冶小松家では幼児二人が二階で遊ぶ中、地震となり家たおれる。当時の商家は大壁（おおい）が多く、そこに小さな窓をとり鉄格子を壁の中へはめ込んでいる所が多く、この家にも延焼する。中の子供は鉄の格子から手を出して「熱いから助けて、出して」と繰り返す。父親は格子の外から暑かろう／＼と手をさすり乍ら、如何ともならず遂に幼児二人は焼死という。

○各家の水瓶・雪隠（せつちん）は一滴の水もなかった。

○森勘左衛門 後藤助次郎と一緒の郡奉行（と古老に聞いたが郡奉行下役ではなからうか。）安政の大変に自らの

責任において御蔵米を開いて町民救済に宛てた。妙因寺の上に墓あり。のち町民これを徳として鳥居をたてていた。

明治十五年（一八八二）六月二四日地震 十一時〇二分強震、壁にひび入り石燈倒る。（四十年史）

明治四十二年日向灘地震（大毎新聞） 十一月十日午後三時十四分頃、九州・四国・及び瀬戸内に亘りて強震あり。今中央気象台員の語る所を聞くに、此の地震は頗る広区域に達し、北は東北地方より南西は琉球に至り、強震の区域も亦従って大にして九州南部より四国一円山陽一帯に及び。震源地は未だ詳細の調査を経ざれば判明せざれども多分日向灘（ひなたな）ならんと察せらる。被害の模様又分明ならざれども宮崎にては障子・壁等亀裂し多度津にては棚の上の物品落下せし等の報ありたれば多小の被害は免れざりしなるべし。而して気象台着電を一括すれば、松山・佐多岬・岡山・熊本・境・徳島・下関・鹿児島・呉・宮崎・多度津・広島・大分等は強震にして場所（ところ）に依り急性上下動ありて家屋動揺し時計（以下なし）

昭和十三年（一九三八）一月十二日〇時十二分和歌山県田辺湾に起った浅い地震。

有感範囲は中部以西で高知の震度は四。（四十年史）

昭和十九年（一九四四）十二月七日東南南海沖地震

有感範囲は関東・北陸から中国東半・四国に及び高知の震度四、（一三時三六分一七秒）震動長く人々戸外へ飛出した。（四十年史）

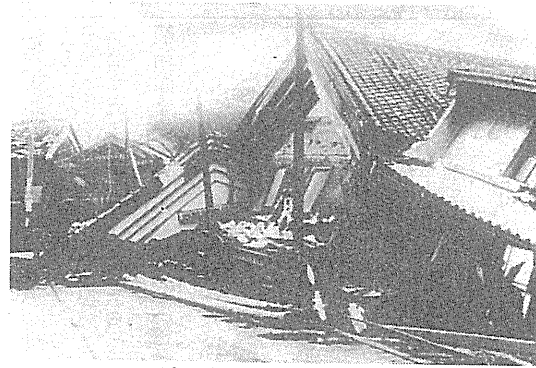
南海大地震（附、その後の地震）

昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日午前四時十五分突如襲った大地震は一万町民の暁の夢を破り恐怖のどん底につき落とし、揺れる暗黒の家から漸々（よやく）のことで戸外に逃れ出た人々を霜の地上にコロコロと転がし、怒涛

災害編

のような物凄い音をたてて、全町二千余の家屋を殆んど全半壊させ、もうもうとたちこめた土煙は救いを求める悲痛の叫びを呑みこみ、一瞬の中に町を修羅の巷とさせ、夜明け迄には完全に町を廢墟と化せしめた。

まだ明けやらぬ地震直後、於東町の県農業倉庫と、宮田小路南方の人家が火を発して人々を狼狽させたが何れも周囲に空地があつて他への類焼をみず鎮火した。だが間もなく、現本町三丁目北部の東側から燃え上つた火の手はみるみる中に拡大し中ノ丁に延焼して倒壊を免れていた配電会社本館にも燃え移り、猛火となって凄惨な光景を呈し、ついに本町東側、中ノ丁中央部の両側の殆ど全部と南上町の一部、計六十余戸を焼き払って漸く鎮火した。



昭和21年12月21日南海大地震
(現大橋通2・3丁目交叉点やや西方)

白日のもとに見る中村市街地は何んという凄惨さであつたらう。中ノ丁・本町一帯の焼跡は余燼が濛々と上り、紺屋町・南北上町・本町・南京町・一条通・天神橋は殆ど全滅、その他の町でも大半は全潰或は半潰し、東下町・栄町・京町・愛宕町などは全潰もあつたが多くは大破しながら漸く昨日までの姿を保っている許りである。国民学校(現二丁目のみ)の三校舎・大講堂・附設幼稚園も無惨に倒壊し、渡川鉄橋もトラス部分八径間のうち、両端を残して六径間が墜落し、中村は再起不能かというのが人々の実感であつた。

当時の状況を詳細に記録しておくことは至難のことではあるが、後世の資料として色々の角度から書いておきたい。

災害編

にかられたという。幡多にとってはかけがえない考古資料ではあるが……。

南海大地震の被害状況（前略）安政元年（一八五四）十一月五日の大震災以来の世紀的な災害で、震源地は「高知の東南方二五〇キロの地点、最大震幅五〇ミリ以上で震度は強震、震動の種類は水平動で東南動」と報告され、その被害は地震とそれに伴う津波のために海岸線を主として県下全域におよんだが、高知県のみならず、四国を中心に近畿・中国・九州から東海・東山の各地にわたって被害をあたえたのである。（高知県史）

このあとへ府県別で被害一覧表が記載されている。それによれば東山(2)・東海(3)・近畿(6)・中国(5)・四国(4)・九州(5)（かっこの数字は罹災県の数）の八地方・二十五県が記されており、その中被害が桁はづれに大きい四県のみを抜萃すれば次の通りである。

被害一覧表（被害甚大の四県抜萃）

県別	罹災者		死者		傷者		方者		住家		非住家		工場その他		浸水家屋	流失家屋	焼失家屋	船舶流失、沈没、破損
	罹	災	死	傷	行不明	全壊	半壊	全壊	半壊	全壊	半壊							
高知	七、一六三	一、八六八	一、一八六	九	四、八四四	九〇四	三	三	五、〇六八	五、〇六八	三	三	三	五、〇六八	五、〇六八	一六	八〇〇	
和歌山	八、九六三	一、一五五	一、一五五	七	七	六九	二、四三三	三	一、四一三	一、四一三	三	三	三	三、三九九	三、三九九	七	七三三	
徳島	三、三三二	一、八五五	一、八五五	六	六	一、〇七六	一、五三三	〇	一、〇七六	一、五三三	三	三	三	五、五三三	五、五三三	三	六六六	
香川	二、六六八	一、八六六	一、八六六	三	三	四、八三三	四、八三三	〇	三、七一九	三、七一九	三	三	三	三、七一九	三、七一九	三	三三三	

これによっても震源地は和歌山県沖でありながら高知県の被害が死者数・全潰戸数などによっても抜群であることが判るが、後載の中村町の被害数と特に比較してほしい。

更に同書には県下郡市別被害状況調が次のように記載されている。

郡市別震災状況調 昭和二十一年十二月二十八日現在

（高知県下）

郡別	死亡		行方不明	傷		家		屋		道路欠潰	田畑浸水	流失船舶	罹災者
	死	亡		負	傷	倒壊	半壊	流失	浸水				
安芸郡	三〇	三〇	五	六	三〇〇	一、三四	八	七〇〇	七	七	〇	七三三	
香美郡	一五	一五	一	一五	二〇	二〇	〇	〇	七	七	三	一、一六	
長岡郡	一五	一五	一	一五	三三	三三	〇	〇	七	七	二五	一、三三	
土佐郡	一三	一三	一	一三	四	四	〇	〇	一六	一六	一	一、四一	
高知市	三三	三三	一	三三	一、七五	一、九七	一、八	二	三	三	〇	一、〇四	
吾川郡	八	八	一	八	三	三	〇	〇	三	三	〇	一、一七	
高岡郡	六	六	一	六	一	一	〇	〇	二七	二七	〇	一、八三	
幡多郡	三〇	三〇	四	三〇	一、七九	一、九四	五〇	二、二七	九	九	〇	一、八三	
計	一七〇	一七〇	九	一七〇	四、八三三	四、八三三	九〇	五、〇六八	一九	一九	三	一、七三三	

（注）「」内の数字は本表により筆者の集計したものである。

また当時幡多支庁の集計になる郡下町村別災害調査表の中、現中村市管下旧町村は次のようになっていた。例えば死亡者数など集計の都度多少の差異のあるのは町内宿泊者の死者を入れたり除いたりなどによるものもあり、集計の都度差違ができたそうである。その後へ罹災報告書の中の特に重要点を抜萃して下記したい。

区分	人の被害				家の被害				非被害					
	男	女	計	死亡	倒潰	半潰	破損	焼失	埋没	倒潰	半潰	破損	焼失	埋没
町	一四九	一四九	二九八	一	一六三	四八三	九〇〇	三三	三	八六〇	二九〇	四〇	四三	三
村	一四九	一四九	二九八	一	一六三	四八三	九〇〇	三三	三	八六〇	二九〇	四〇	四三	三

り出しにより付近田地用排水路を埋めた。」また旧中村町内、区別被害表は次の通りである。

各区別被害表 (区内世帯数は昭和二十一年十二月一日現在の配給物資台帳) (被害数は昭和二十二年一月二日各区長の報告による)

区名	区内世帯数	全壊世帯数	半壊世帯数	焼失埋没世帯数	死亡者数
築地	七五	一八	一四		三
西下町	六〇	二八	三一		二
袋町	一三五	一〇	二四		五
東下町	八四	二	一二		
栄町	一一八	二二	七九		九
天神橋	一〇五	六七	三四		二
一条通	六三	五四	九		七
南京町	二〇四	一八〇	一一	一	四三
新町	八七	七九	一		一一
京町	七〇	三五	一七		六
中ノ丁	一一四	九〇	六	三四	三二
紺屋町	七九	六三	一一		一七
北上町	七五	四七	一四		一〇

計	南上町	本町	愛宕町	上谷	小姓町	山際	百笑	天神下	中村	朝日	右山	角崎	不破
二、四四八、一一一	四四	四六	一四九	九七	二二二	一四一	八六	五一	一〇六	三八	八七	二五	八八
一、一一一	二七	一九	八一	八	一一二	四三	一四	六	七九	五	八	三	二
六一一	九	一	二六	一五	二七	八四	七	四	二二	七	八三	一五	四八
六〇六	八	一三			(埋没)				一				
二七八	九	一〇	一一	五	三二	一〇	七	二	一三		一		

応急措置 この大災害に対し即刻対応しなければならぬ諸々の問題点が山積した。さいわい愛宕町(現本町一丁目)にあった町役場が倒潰を免れていたことは何よりであった。しかし坂本町長は公務上京中であり、小野助役は自宅倒潰のため重傷を負い、吏員の大部分も自宅が全半潰或は家族に死傷者を出すという罹災者である関係

で、直後緊急の措置が思うにまかせ難かったが、それでも幸いに罹災を免れた尾崎収入役・上岡庶務主任を中心として若手吏員、それを助けて区長団・消防団・青年団等が寝食を忘れて活躍した。即時着手すべき問題として次の項目などあげることができる。(1)消火活動 本町・中ノ町出火と同時に消防団は出動している。(後載)

(2)負傷者の収容 町内病院のすべてが大小被害をうけ、医師の中にも火災死、倒潰死その他負傷者もあって多数の一般負傷者の収容にも大きな支障を来したが、半潰の幡多・杉・細木の各病院と太陽館(映画館)に収容、応急の措置を施した。(3)死者の収容と処置 死者は警察署、青年団・消防団・隣家の人達の協力を得て、正持院・正福寺・大神宮に収容し、土葬希望者以外の約百五十体(当初希望者)は岩崎堤防南端沖の渡川原で火葬に附することとする。(二十一日以後三日間で)、また棺が間にあわぬため町役場裏の一条神社境内で大工を督励して荒板造りで急造する。(4)罹災者の収容 家屋の倒潰・焼失による罹災者の収容はその数が夥しいだけに心痛事であったが、大多数は親戚・知人の残存家屋や神社・寺院等に各自それぞれ身をよせて貰い、その他の人々は県立中村中学校同中村高等女学校及び伝染病隔離病舎等に収容した。(5)食糧の確保 食糧営団に交渉して差当り玄米三日分宛と附近町村からの救援食糧を配給して当座の飢餓を救う。(6)救援物資の配給 進駐軍・県・其の他各方面からの衣料・食糧・薬品等多数の救援物資の配給等も大きな仕事であった。

町吏員その他諸団体の活躍 以下の記録は将来への反省資料たるべきものをとの考えから、当時より折にふれて筆者の聞き書き・見聞等を書き集めたもので、印象・感銘の強弱に偏したり、同等に記すべき事件・人物を書き落した場合もあろうし誤記の恐れもある。それらの点は御寛恕を願いたい。

町吏員の活躍 当時の町吏員は使丁・給仕を含んで僅か二十六名で、しかも前述の通り、全家庭がそれぞれ罹災の家でありながら前記各項目の元締的ポストとしてすべての面で働かねばならなかった。筆者が記名している方には亀谷利泰・岡本崇・山崎迪・永田静子の諸氏があり、その他若干の記載洩れがあろうか。ともかくこれら

災害編

岩が今も隆起を物語るかきの付着もありと。(NHK岸本氏談)

津大村 ○今迄使用していた井戸水も出なくなり、川・谷川の水は泥水となり、谷川の水も殆どなくなっていた所もあった。

安政・南海大地震の中村の比較 筆者の勝手な判断では宝永・安政・南海三大地震の中、宝永は抜群の強さであったらしいが、安政・南海では安政やや大と判断する。それは(1)南海は津浪が極めて軽少ですんでおり(但し大方町は大)(2)ゆり方の記録や聞きとりが南海が安政よりこわさを感じないだけで判断してのことであるが、それにしても両者を比較するとき

(1) 両者の共通点は、大字中村町の場合、全潰の多い一条神社以北の各町々では両者が殆んど同じように全潰が極めて多いという点である。治水工事業務所発表の沖積層五〇層と書いたが別書では八〇層と書いたものもあって、とも角軟弱地盤を想定させる。

ちなみに安政期の天神橋、東下町、一条通、南京町は家が少いので比較し難い。
相違点は

(2)の1 火災は断然安政が多い。安政は地震発生期が夕暮の炊事時刻の火によるもので、わらぶき屋根の多い事が拍車をかける。南海は午前四時十五分就寝中のため。

(2)の2 死者は断然南海が多い。

安政は当時わらぶき屋根が多くて頭が軽く更に屋根裏の空間が多いが、南海はまた就寝中でにげる暇もなかったためと、ベシヤンコ倒れの家が多いためであろう。但し昼間学生の就学中なれば小学校だけでも多数の死者を出したことかと思うとき、身の毛のよだつ想いである。

(3) 関連地震の有無 安政は多く南海は少い。

昭和三十五年(一九六〇)五月二十四日チリ地震津波 五月二十三日四時一分頃、南米のチリ沖で大地震が

発生し、地震による津波が秒速二〇〇層で太平洋を横断、二十四時間後(二四日早朝)日本全域の太平洋岸に来襲し、本県来襲第一波は桂浜で三時四十三分、清水三時三十五分である。十時頃迄に最大全振幅二〜三層の津波が数回来襲し二十八日夕刻頃まで異常潮位が続く。

昭和三十六年(一九六一)二月二十七日地震 三時十一分頃日向灘を震源とする強震あり(高知・清水震度三)、清水では最大波高一層(周期約二十五分)の津波を観測した。被害なし。(四十年史)

昭和三十九年(一九六四)十一月九日地震 二時五十六分頃本県中部山地で震度三の地震発生、深さ二〇キロ、地震発生数の少い本県にとっては珍らしい地震。(四十年史)

日向灘地震 昭和四十三(一九六八)年四月一日午前九時四十三分、西日本一帯と東海地方の一部でかなり強い地震おこる。日向灘地震という。震源地は日向灘沖海底下約四十層で、マグネチュード七・七、規模としては新潟地震に匹敵し戦後五番目で西日本では南海地震(マグネチュード八・一)につぐ強さ。宮崎・熊本・高知・山口各県などで家屋の倒潰や死傷者がでており、下田岸壁が五〇層にわたり幅十層の亀裂、陥没を生じ、入田・中村・佐岡堤防が五ヶ所七五四層にわたり、一〜十層の縦亀裂が先端に発生した。

また午前十時には宇和島・足摺岬で津浪の第一波が押し寄せ、室戸岬・潮岬・尾鷲^{おわせ}などの各地でも津浪を観測。漁船も陸へうちあげられたり沖へ流されたりしている。

県下の震度は三から五が記録され東に低く西に高い。西南地域では南海大地震以来の強震で、柏島では全半潰五戸をだし、平山ではビニールハウス一粉とドラム缶十六本が流失、土佐清水市では堤防決潰や道路の亀裂などかなりの被害がでている。

津浪は地震後、三十分で足摺を一・二層の高潮で襲い、宿毛では一・四層も潮がひいている。十時十五分には

災 害 編

津浪警報も発令され、海岸地方の人々を緊張させたが心配した程のことはなかった。震度は宿毛・土佐清水市で五、中村・高知四、室戸三と記録されているが、中村は相当に強く、南海大地震でコリ／＼している筆者は、裏の家へ老義父母を庭へ出しに行つて一人を背負つたとたん家が倒れるかと思うし、近所の家族は丁度道路に出ていたが、親子が腕をくまなければ立つて居れなかつたと言つており、折柄自転車を通りかかった青年はゆり始めてやつと片足をおろしたもののつづく大ゆれでついに転倒する。庭の樹木が大ゆれにザア／＼と音をたててゆれたことが印象強く残っている。

小学校の東沖の後川堤防に大亀裂ができ、小姓町・日ノ出町には屋根瓦のずれた家、おちた家が多く、壁やタイルのおちた家が相当数あつたが、ほかにもこんな家は多かつたことと思う。高知新聞では県下で三千七百戸の壁がおちたと報告している。

市内の商店では特に酒屋・食糧品店、ガラス店など陳列台が倒れた被害が多く、最大被害店は沢近ガラス店かと噂されたし、井上ガラス店でも約二十万円の商品損害をうけている。

特に大月町弘見・古満目・浦尻等の海岸地帯と旧宿毛町等が地震・高潮等の被害が大きく、古満目地区では床下浸水四〇戸、浦尻で床上浸水十戸を出し、又両海岸一帯の養殖真珠イカダその他養殖漁業関係の被害が大きかつた。